

暁の大地
2

成尾
陽

目次

四、感謝と祈願 ◆ 7

いただきます ◇ 7

神人共食 ◇ 17

向上への道 ◇ 24

感謝と希望と安心 ◇ 33

よりよき道を求めて ◇ 42

み手代 ◇ 51

み手代お取次ぎ ◇ 60

み教えに「明従」 ◇ 70

感謝と祈願と誓いと祓い ◇ 80

一霊四魂 ◇ 89

すべての事業をなすにも ◇ 99

恐るべきは執着心 ◇ 108

幸魂の愛深く ◇ 118

鎮魂帰神の神術によりて ◇ 127

敬けんな姿で深い祈りを ◇ 137

晴れやかな心 ◇ 147

就活の道 ◇ 157

五、愛と信 ◆ 166

生きがい講座 ◇ 166

愛善と愛悪 ◇ 175

神に通ずる門戸 ◇ 184

宗教と芸術 ◇ 192

清らかな遊び ◇ 200

信仰即生活即芸術 ◇ 209

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地
2

四、感謝と祈願

いただきます

玄関に入り大地は靴を脱いだ。

「ゆったりしていいいなあ」

振り返って玄関を見回し、自宅の玄関とその広さを比べ、「自分の部屋より広いかもしれない」、と大地は今更ながらうらやましく思った。そして、腰をかがめキチンと靴をそろえてから廊下上がった。その様子を、後から入ってきた松太郎が、目を細めて見ていた。

奥へ進むと、居間の方からエプロン姿の祖母・ともが出てきた。

「遅かったねえ」

「みろく殿で、おじいちゃんにいろいろと教えてもらってたんだ」

大地が笑顔で答えた。

「また長々とおしゃべりしてたんだね。つきあってくれてすまないねえ」

「あつ、いや、勉強になったよ」

「そうかい、それならいいけどね」

と、ともも笑顔で返した。

「もうすぐお昼だから、ごはんにしようか。何か食べたいものでもあるかい？」

「そうだねえ……。さっき、節分大祭の時のうどんの話をしたら、何だかうどんが食べたくなつたなあ」

「そう。じゃあ、お昼はうどんにしようか。確か、〃ささめうどん〃があつたから、ゆがこうかね」

「ささめうどん？」

「普通のうどんより細めの麺だけだね、これがおいしいんだよ」

「へえ、楽しみだなあ！」

「まあ、しばらくゆっくりしといて」

と言いながら、ともは台所に入っていた。

松太郎と大地は、居間でくつろぎながら、テレビを見ていた。しばらくして、とももが台所から顔を出した。

「おじいさん、薬味のネギをお願いしますよ」

「おっ、そうか。じゃあ、採ってくるか」

と、立ち上がろうとした時、大地が声をかけた。

「裏の畑でしょ。ぼくが採ってくるよ」

「わかるかい？」

「大丈夫。昨日も畑に行ったし、わかるよ」

「青い細いネギだからな」

松太郎が念を押した。

「了解です」

大地は自信ありげに言った。

「裏口のところにハサミがあるから、それで切ったらいいからね」

「えっ、抜いたらダメなの？」

大地は、驚いたような口調で言った。

「ネギは根元から切ると、またそこから芽が伸びてくるんだよ」

ともがニコニコしながら言った。

「へえ、そうなんだ」

大地は感心した表情をしながら、裏口へ向かった。

しばらくして、大地が一握りのネギを持って畑から帰ってきた。

「はい、おばあちゃん、これだね」

と、ともに向かって差し出した。

「ありがとう。もうすぐできるからね」

「はい」

大地は洗面所に行つて泥がついた手を洗つて居間にもどり、ソファに腰掛けた。

台所からは、ネギを細かく切る包丁の音が聞こえてきた。

ほどなく、ともがお盆にうどんの入ったどんぶりを二つ乗せて台所から出てきた。

どんぶりを食卓に置きながら、「さあ、できたよ」と声をかけた。

「どれどれ」

松太郎と大地は、返事をしてソファから食卓に移った。

「おいしそう」

大地は、湯気の立つさきめうどんを目の前にしてうれしそうに笑った。

ともは再び台所に入り、もう一つのどんぶりと箸三膳、薬味のネギ、七味唐辛子な

どをお盆に乗せて戻ってきて配膳し、食卓に着いた。時計の針は正午前を指していた。

「はい、お待たせ」

「じゃあ、いただこうか」

「おじいちゃん、三首のお歌だね」

「そうだ、覚えてたな。じゃあ」

と言いながら手を合わせた。

「天の恩土のめぐみに生まれたる……」

三人は、声をそろえて三首のお歌を拝誦した。

「いただきます」

二拍手をして箸をとった。

大地はどんぶりを持ち、音を立てながらうどんをすすった。

「これ、おいしいね。ささめうどんって初めて食べたけど、いけるなあ」

「おいしいだろう」

ともがうれしそうに答えた。

関西風の薄味だが、トッピングした揚げと天かすが風味を引き立てていた。

「なんだか、ネギもいつもと違っておいしいなあ」

「そりゃあ、無農薬栽培で新鮮だからなあ」

松太郎は、「俺が作ったからなあ」と言わんばかりの笑顔で答えた。

大地は、あつという間に完食。大盛りのおかわりをした。

「あゝ、おいしかった。ごちそうさま」

「今、お茶を入れるね」

そう言つて、ともが席を立った。

「んゝ、うまかった。ほんまにありがたいこつちやなあ……」

大地は、松太郎のかみしめるような言い方に反応した。

「えっ、何が？」

「いやなあ、こうして元気で、おいしい食事をいただけること。ごく普通に当たり前のことが、この歳になつてくると、＼ありがたいなあ＼と思えるんだよ」

「ふうん」

「そしてなあ、毎日、畑に出て土をいじっていると、＼ああ、生かされているんだなあ＼とを感じるんだよ」

「生かされているう？」

「そう、生かされている」

松太郎はしみじみと言った。

「大地、人間はなあ、自然の一部であって、自然と共生しているんだよ」

「共生って、共に生きているってことだね」

「そう、日頃は忘れてしまいがちだけど、人間は自然の力に大きな影響を受けながら生活を営んでいるし、偉大な恩恵を受けながら生かされているんだ。今は冬だけど、春になって草木が芽吹き、小鳥のさえずりが聞こえてくると、人間の心も春めいてくるだろう」

「そうだね。桜が咲くと、やっぱり花見に行きたくなるもんね」

「そうだろう。梅雨の季節になって雨の日が続くと、気持ちもなんとなくジメジメしてこないかなあ」

「そうそう、わかるわかる」

「そんなふうに、人間の心は、自然の風土や環境、気候の変化にとっても影響されるんだ」
「なるほどね」

「それに、自然の力なしには、人間は生きていけないんだ」

大地は黙ってうなずいた。

「さっきうどんを食べる前に、大地は何て言ったかな？」

「えっ、天の恩土の…」

松太郎が言葉を遮った。

「いやいや、そのあとだよ」

「えっ、三首のお歌の後は、いただきます、だね」

「それはどういう意味だかわかるか？」

「うどんを作ってくれたおばあちゃんに、ありがとう、っていう意味…かな？」

「もちろん、それもあるなあ。でもそれだけじゃないんだ」

「というと」

大地は、首をかしげた。

「実は、いただきます」という言葉は、命をいただきます。っていうことなんだよ」

「えっ、命をいただきます、ってヤクザ映画みたいだね」

「いやいやそうじゃなくって、生き物の命をいただくということなんだ。人間が口に

する食べ物、元はすべて命があつたものなんだ。さっきの昼食だつてそうだよ」

大地はちよつと不思議そうな表情で聞き返した。

「確かにネギは植物だから命があるつてわかるけど、うどんは袋に入つた乾麺じゃなかったの？」

「そうだよ。でもその麺の原料はどうかかな？」

「うどんの原料は、小麦粉だつたかなあ？」

「そうだ、小麦粉と塩と水だな。その小麦粉の元は小麦。ということは植物だから、ネギと同じように命があつたわけだ。小麦は、太陽の光と、水と大地の恵みを受けて命を育ててきたと思わないかい？」

「そうか、その命があつたからうどんができたんだ。それに、三首のお歌にあつたように、火と水と土の恵みがなければ、その命は育たないつていうことだね」

「そういうことだ」

「だから、いただきますという言葉は、食材の“命”をいただきますということなんだね」

「そう、だから人間は、自然から命をいただきながら、自分の命をつないでいるんだ」

「なるほど、そういうことなんだね」

「それに、“いただきます”という言葉は、外国ではあまりない言葉だそうだ。だから

日本人の文化として誇るべき言葉だと、おじいちゃんは思っているんだ」

松太郎は、誇らしげに言って話を続けた。

「それに……」

神人共食しんじんきょうじやく

「なにい？」

大地は興味深げに聞いた。

「食事の後の『ごちそうさま』という言葉もいい日本語なんだなあー」

松太郎が答えた。

「ごちそうさま？ も」

「そう。大地は『ごちそうさま』って漢字でどう書くか知ってるかな？」

「え〜つと、豪華な食事のゴチソウだね。確か…、あれ、すぐに出てこないなあ…」

大地は、「大学生なのに漢字が思い出せないなんてカッコ悪いなあ」と思いながら、頭をひねっていた。その様子を見た松太郎は、「ははあ、こりゃあ分からないなあ」と察した表情で答えを出した。

「馬へんに也と、走ると書いて馳走ちそう。その前と後ろに御と様をつけて、『御馳走様』つてなるんだ」

「あつ、そうそう、思い出した」

大地は照れながら言った。

「馳走というのは、読んで字のごとくで、かけはしること、奔走ほんそうすることなんだよ」

「ああ、走り回るってこと？」

「そういうこと。食事の材料を調達するためにあっちこっち走り回る。それこそ、水道や電気がない時代だったら、食材だけでなく、水をくみに走るとか、炭を買いに駆け回るとか、とにかく食事を作るために奔走したんだろうなあ。だから、そうやって苦勞し、心を込めて作ってくれた人の思い、まごころに対して感謝の気持ちで、馳走に御と様までつけて、御馳走様ごちそうさまって、お礼を言うんだよ」

「なるほどなあ」

大地は感心した表情で言った。

「いただきます」も「ごちそうさま」も、そんな深い意味があつたんだね」

「そういうことだなあ。神さま、自然や人と、つまりはすべてに対しての大きな感謝の心が、この言葉を生んだんだろうなあ。外国語の表現にはあまりない言葉だから、今さらながら日本語はすごいもんだと思うよ」

松太郎はそう言った後、思い出したように「そうだ」と言った。

「箸はしの話があるんだが…」

そういうと、目の前の箸置きに乗った自分の箸を取った。

「この箸は、うどんがつかみやすいように、木地の四角い箸だろう」

と言いながら、持った箸を大地の前に差し出した。

「そうだね」

「でも、普段わが家では、塗り箸を使っているんだ。塗り箸は食事の度に洗って使うだろう。つまり何度も使うことになるなあ」

「まあ、わが家でもそうだし、普通だよな」

「でもなあ、普段使いの箸はそれでいいんだけど、お客さんを迎えて食事を差し上げる時は、新しい箸を使うのがいんだよ」

松太郎の話に、大地が首をかしげた。

「でもおじいちゃん、塗り箸だったら、新しいかどうかわかりにくいんじゃない？」

「さすがは大地、その通り！ だから木地の箸を使う方がいいとされているんだ」

「木地の箸？」

「大地は、千利休を知っているかなあ？」

「うん、茶道を大成した人物だよな」

「そう、その千利休は、茶会を催すときには、決まってお膳を出す直前に箸を削っていたんだ」

「へえ、直前に？ そりゃあたひへんだね」

「たぶん、とても手間がかかっただろうなあ。でも利休は、削りたての箸でないと杉の香りがしないからよくない、と言って削っていたそうだ」

「杉の箸なんだね？」

「懐石料理の中でも、茶道のお茶事という催しの中で出す料理を茶懐石というんだけど、その茶懐石で使うお客さま用の箸は、赤杉でできた『利休箸』というのを使うんだ」

「利休の名前がついているんだね」

「長さは八寸五分というから、二十六センチくらいで、両端が細く削つてあるんだ。これは日本独特の箸の形で、両方が細いから『両細』というんだ」

「両端とも同じ形なら、どっちを使つてもいいんだね」

「そうだなあ。まあ、百聞は一見に如かずで、実際に見る方がいいなあ」

と言いながら、松太郎は台所で洗い物をしているともを呼び、利休箸を持つて来るように頼んだ。

しばらくして、ともが利休箸を持って台所から出て来て、「はい、これだよ」と、大地に渡した。

「なるほど、これが利休箸か。初めて見たなあ」

大地はそう言って、箸を自分の鼻に近づけた。

「ほんとは、ほんのり木の香りがするなあ」

「まあ、それは少し古いから香りも薄くなっているだろうけど、削りたてだったら、もつといい香りがするはずだ」

「そうだろうね。でも、なんで両方を同じ形にしたんだろう？」

「それも理由があるんだ。実は、一方は神さま、もう片方は人間が使う、ということなんだ」

「へえ、そんな意味があつたんだ」

「これを昔からしんじんきょうしよく神人共食しんじんきょうしよくと言っているんだ」

「神人共食？」

「お茶の世界だけでなくって、日本では古来お正月のおせち料理をいただくときも、両細の箸を使ったもんなんだ。日本には、正月三が日にはとしがみ歳神さまをお迎えするといふ風習があつて、食事をお供えし、一方を神さまが使われ、もう一方は人が使つて食

べる。つまりは、お正月のおせち料理をいただくというのは、神さまと人といっしょに食事をいただき、神さまのご守護をいただいて生命を更新させる神事でもあったんだ。だから正月三日使う両細の箸を、「祝い箸」や「両口箸」、「柳箸」ともいうんだ」

「柳箸？」

「柳を材料にして作った両細の箸なんだが、柳は香りが良くて水分が多く、折れにくくて、春一番に芽を出す強い生命力があるんで、縁起がいいとされているんだ」

「なるほど、深い話だねえ」

「神人共食というのは、大本で言えば、神さまの祭典のあとに、お供えしたお下がりをいただく「直会なむらい」にもつながるだろうなあ」

大地は「あれ？」というような表情で松太郎に聞いた。

「おじいちゃん、直会って、おまつりの後に食事をいただくことだね。でも、おとこの節分大祭でも直会ってあったっけ？」

「節分大祭は、夜からの祭典で直会はないんだけど、ほかの大祭や毎月の月次祭などでは、必ず直会があるんだ。直会というのは、緊張感のある祭典で神さまにお仕えして、それが終わって元に戻るとのこと。「直り会むらひ」というところから直会といふうにな

つたと言われているんだ。その直会を通して、参拝者は神さまからのみ恵みを分かち合うということなるんだ」

「なるほどなあ、箸にしろ、直会にしろ、それに、いただきます」や「ごちそうさま」のあいさつにしろ、突き詰めていくと、神さまとともにある、ということなんだね」

大地は、手にした利休箸を見ながらそう言った。

「そうだなあ。調伏行事ていふくぎょうじは別として、本来、日本の良き伝統には、すべてが神さまと共にあるという精神が流れていて、その感謝の心が、言葉や風習に受け継がれているんだろなあ」

「大切にしないといけないね」

大地は自然と笑顔になっていた。

向上への道

神さまの話となると、松太郎は夢中になってしまふ。ましてや相手が久しぶりに訪ねてきた孫であればなおさらだ。だが、あまりしつこく話すと、若い者には煙たがられることも知つてはいた。幸いなことに、大地は大学四回生とあつて、松太郎の話に興味を持つてくれた。松太郎にとつてはうれしいことであつた。

一方の大地は、「節分大祭」明けの二日間、松太郎とずっといっしょにいるような気がした。いや、気がしたのではなく、事実そうだった。昨日は終日、神さまの話や大本出現の意義について教えてもらった。今朝も午前中は、みろく殿でほとんどの時間を過ごした。松太郎の家にもどつてからは、お昼のうどんを食べて、「自然と人間との共生」や「神人共食」の話など、次から次に飛び出す松太郎の博学ぶりに、感心させられていた。

でも、正直少し疲れてきた。

「ここで質問すると、また話が広がつてしまふかも」

そう思った大地は、もう一度「ごちそうさま」と手を合わせ、「トイレへ行く」と言つて、席を立つた。

「大地、おじいちゃんにつきあつてばかりだとたいへんだから、ちよつと部屋でゆっくりしたらどう」

と、ともが言ってくれた。

松太郎は、「何を言うか」というような表情でともの方を見た。

「うん、そうするよ」

大地はそう言いながら、リビングを出た。

用を足してから、大地は荷物を置いた部屋へ入った。

室内はヒンヤリしている。ファンヒーターのスイッチを入れ、畳の上に腰を下ろした。たたんでいた布団にもたれかかり、両手両足を思い切り伸ばして深呼吸をした。

ポケットから携帯電話を取り出し、メールをチェックした。メールの着信があったのはわかっていたが、松太郎から話を聞いている間は、チェックすることを遠慮していた。開くと数件のメールが入っていた。ほとんどが登録サイトからのものだったが、その中に母・京子からのメールがあった。

「綾部は寒いですか？ おじいちゃんとおばあちゃんは元気ですか？ ゆっくりしてきてね」

そういえば綾部に到着してから、一度「着きましたメール」をしただけで、あとは何も送っていないかった。

大地はすぐに返信メールを打ち始めた。

「けっこう寒いです。信州より寒いかも。おじいちゃんもおばあちゃんも元気です。おじいちゃんからいろんな話をじっくり聞かせてもらってます」

と、ここまで打ってから、「ゆっくりしてきてね」のメッセージが気になった。

もともと綾部に来たのは、もうすぐ卒業というのに、就職活動がうまくいっていないからだ。あせりもあつて気持ちがいっていったところに、京子のすすめがあつて、気分転換のつもりでやってきたのだった。

それが初めての節分大祭参拝や松太郎から聞いた数々の「話」のおかげで、気がつくときもちが少し楽になっていた。

大地はしばらく考えてから、「ゆっくりできたので、明日の午後、帰ろうかな?」と付け加え、送信ボタンを押した。

携帯をポケットにしまうと、急に眠気が襲ってきた。

メールの着信音で気がつくのと、どうやら二十分ほど眠っていたようだった。メールは京子からの返信だった。

「そう、了解です」

意外とあっさりしていた。

夕食の時間、明日帰ることを告げると、祖父母は残念がっていたが、大地の就活のことを考えると無理に引き止めるわけにもいかなかった。

大地は、祖父母との温かい語らいの時間がことさらいとおしく思えた。

「自分のことを思ってくれ、遠くから見守ってくれる祖父母がいる」

そう思うと、心が救われるような気持ちになっていた。

翌日の昼前、松太郎が駅まで軽トラで送ってくれることになった。お土産で増えた荷物を荷台に乗せた。軽トラに三人は乗れないので、ともは家の前で見送ってくれた。たった四日間だったのに、別れが悲しかった。思わず目頭が熱くなった。

「お母さんや、みんなによるしくね。またおいでよ」

「うん、また来るからね」

ともの言葉にそう答えながら、軽トラの窓から手を振った。

ともの姿が見えなくなつてから、窓を閉めた。

「おじいちゃん、お世話になりました」

大地は松太郎に、あらためて礼を言った。

「あつという間だったなあ」

「そうだね」

「あつ、そうそう」

と、松太郎は思い出したように言つて、一冊の文庫本を大地に渡した。

「お母さんも持っていたはずだから、大地も読んだことがあるかもしれないがなあ」

見ると表紙に『生きがいの探求』とあつた。

「尊師さま、日出磨先生の本だ」

「見たことはあるかも？ でも、しっかり読んだことはないなあ」

「そうか。じゃあ、一度じっくり読んでごらん。きっと役に立つはずだ」

「ありがとう。読んでみるよ」

「その本は、三代教主補の尊師さまが、学生時代の大本入信から結婚されるまでの十年間ほど、大学ノートに書きつづられていた随想をまとめたものなんだ。ちょうど今

の大地くらの年のころだなあ。最初は、大本の機関誌に連載されていたんだけど、それを『信仰覚書』というタイトルで、今から四十五年ほど前に全八巻で出版されたんだ。

そのあと、その中から一般にもわかりやすい文章を選んでまとめられて講談社から出版されたのが、『生きがいシリーズ三部作』で、その最初がこの『生きがいの探求』なんだ。当初は単行本だったんだけど、その後、手軽に持てるようにということで大社から、文庫版で出版されたんだよ」

松太郎は、時折、大地が手にした『生きがいの探求』に目をやりながら説明した。

「そうなんだ」

大地はページをめくりながら言った。

「おじいちゃんも、好きなお示しがたくさんあるんだよ」

「たとえば？」

「そうだなあ、確か『向上への道』というタイトルがあったろう」

「向上への道？」

そう言いながら、大地は目次ページを見た。

「あつ、あつた。五十ページだね。向上への道、人生とは、って中見出しがついているよ」

「ちょっと読んでごらん」

「わかった」

大地は声に出して読み始めた。

どんなにつらい環境にあっても、これを切りぬけようと努力をつづけるところに人生はある。

いたずらに他をうらみ、世を呪ってはならない。

何かに向かって働くのが人生だ。

貧窮ひんきゆうになってみて、はじめて、貧乏ひんぱうのどれほど辛いものであるかがわかる。病気になるなつてみてはじめて、病人の気持ちきもちが了解できる。死んでみて、はじめて、死というものが理解できる。

宇宙は大学であり、真理はどぶの中にもころがつている。

たえず何かを求めて、あがき苦しみ、もがき呻うめいて、そして、ついに何かを悟ることができたら、人生は成功だ。

悟っただけの世界へ、死後は、はこばれるのだ。

ある与えられた道筋より外へは出られないのである。しかし、その道筋というのは、

けっして、最初から一定不変の絶対的のものではなく、その方向は絶対的であっても、その長短や道幅は、人間の努力ひとつで、どんなにでもなるものである

そこまで読んで、大地はうなずきながら、もう一度活字を目で追った。

「ん、今の自分にピッタリくる文章だね」

感心したように言った。

「そうだな。今の大地は就職が決まらなくてたいへんな時期かもしれないけど、とにかく前を向いて、神さまにお願いしながら、しつかり進んで行ってほしいなあ」

松太郎はしみじみとした口調で言った。

「うん、おじいちゃん、がんばるよ」

「そう、その調子だ。また何か困ったことがあったら、遊びにおいで」

「ありがとう、また来るよ」

大地は、心強い気持ちになっていた。

綾部駅に着くと、松太郎は軽トラを駐車スペースに止めた。大地は、『生きがいの探求』をバッグにしまい、車を降りて荷台の荷物を持った。

松太郎は二階の改札口まで大地を見送った。

「いい就職先が見つかるといいな」

「うん、がんばるよ。おじいちゃん、いろいろとありがとう。元気でね」

「ああ、大地もな。気をつけて」

「じゃあ」

大地は、あとを振り返りながら、ホームへ降りていった。

感謝と希望と安心

別に急ぐ旅でもないからと普通列車に乗ろうと思つたが、昼前後の時間帯だと、山陰線の上り普通列車は一時間に一本しかなく、しかも途中の園部で乗り換えなくてはならない。仕方なく大地は京都市行き特急「きのさき」に乗り込んだ。土曜日とあつて乗客は多かつたものの、何とか自由席の通路側に座ることができた。乗車券は往復で買つていたので、巡回して来た車掌から特急券を買つた。電車は丹波の山中を京都へ向かつて走る。途中山裾の所々に、雪が残つていた。

朝、「いらない」と言つたのだが、とものが弁当を作つて持たせてくれた。時分時になり腹も減つてきたので、ともの弁当を開いた。小ぶりのおにぎりとおかずが数品きれいに並べられていた。口の中で、祖母の愛情が広がるような感じがした。

「ありがたいなあ」

大地は素直にそう思つた。

電車が亀岡に近づくと車窓からの景色も町並みが多くなつてきた。しばらくして亀岡駅に停車した。駅の正面、南郷の壕ほの向こうにたたずむ杜が、大本の二大聖地の一

つゝ「天恩郷」である。

「亀岡には降りたことがあったなあ」

いつだったか大地は、母・京子に連れられて天恩郷に参拝に來たことがあった。ただ、駅舎がずいぶんと変わっているのには驚いた。

大地は再び、亀岡の地を訪れることになるのだが、この時は知る由もなかつた。

綾部を出て一時間十分で京都駅に着いた。大地は、みどりの窓口に向かい、長野行きの特急券を買った。京都から名古屋まで新幹線で乗り継ぎ、名古屋から長野行きの特急「しなの」に乗るためだ。日中、「しなの」は一時間に一本あり、午後三時発の指定をとった。それから乗車までの待ち時間、駅構内の売店で実家への土産物を買うことにした。

「お土産はいらないよ」

京子には言われたが、そうはいかない。買っていかないと、妹のちあきと弟の司に責められるのは目に見えていた。兄として手ぶらでは帰れない。二人の顔を思い浮かべながら、京土産を選んだ。

京都から名古屋までは、新幹線で三十分余。速いものである。名古屋駅に着くと、

在来線への乗り換え口から中央本線のホームへ向かった。三時の出発までにはまだ時間があつた。ベンチに腰を下ろすと、良い匂いがしてきた。見るとホームに立ち食いそば屋がある。名古屋だけに、もちろん「きしめん」もある。山陰線の車中でもが作ってくれた弁当を食べたものの、小腹がすいてきた。

「やつぱ、名古屋に来たらきしめんでしょう」

そう自分で納得し、店の入り口で食券を買い、のれんをくぐつた。せっかくだからと名古屋コーチン入りのきしめんを奮発した。店の中には、先客が三人いた。

「いらつしやいませ」

女性店員が声をかけ、すぐにお冷やを出してきた。大地は、

「お願いします」

と食券を差し出した。

「少しお待ちください」

この手の店はお客の回転も速い。ほどなく目の前にきしめんが出てきた。大地は箸立てから割り箸を取り、手に持った。その時ふと松太郎の顔が浮かんだ。そして、「神人共食」の話や、松太郎から聞いた「いただきます」や「ごちそうさま」の意味、二代教主さまの「三首のお歌」のことを思い出した。松太郎の家では、何の抵抗もなく

言えた三首のお歌だったが、ここで声に出して言うのはさすがに恥ずかしく抵抗があった。

「おじいちゃんなら、たぶんここでも三首のお歌を奏あげるんだろうな。でもまあ、僕はまだ完全におぼえてないからなあ……」

と自分に言い訳をしながら、それでも手を合わせて小さく二拍手し、「いただきます」と言つて食べ始めた。体が冷えていたせいもあり、温かくておいしかった。

汁も飲み干し完食。終わつて手を合わせて「ごちそうさま」と言つた。それを聞いた店員が、「ありがとうございます」と言葉を返した。

今までは飲食店で食事をし終わつても、無言で立ち去ることが常だった。それが自分から「ごちそうさま」と言っているではないか。大地にとつては、ちよつとした進歩であつた。店員が返した「ありがとうございます」の一言も、儀礼的というのはわかつていても、どこことなく気持ちよく受け取れた。大地は、言葉に気持ちを乗せることの大切さを感じていた。松太郎のおかげだ、と思つた。

店を出ると同時に、特急「しなの」がホームに入つてきた。車内の清掃終了のアナウンスが流れてから、列車に乗り込んだ。進行方向左の窓側の席だった。

午後三時、列車はゆっくりと発車した。終点の長野まで約三時間。到着は夕方六時前の予定だ。この中央本線は岐阜県東部や長野県の山間部を通過するためカーブが多い。そこを走る特急「しなの」は、「振り子式車両」が用いられている。カーブでできるだけスピードを落とさないようにするため、車体重心を下げ、スプリングも柔軟に作られている。そのためカーブでは、従来の車両より車体の傾斜が深く振り子のようなのが特徴なのだ。乗っていると大きくゆっくり揺られているような感触がする。

大地は、「しなの」に乗ってしばらくしてから、携帯でメールを打った。

「今、名古屋駅を出ました。七時前には帰ります」

京子へ送信した。ほどなく着信バイブが作動した。

「了解です。夕食は？」

簡単な返信が返ってきた。

「家で食べます」

もちろんだよ、と思いながら送信した。

「了解。気をつけて」

相変わらずあっさりしたメールだった。

大地はメールを返した後で、Eメールを取り出し、音楽を聞き始めた。井上陽水の「傘がない」。就職が決まらない今、妙にはまっている曲だった。列車は雪深い木曾の山中を走り抜ける。

一時間ほどして、車内アウンスで、「寝覚めの床」の案内があった。大地は車窓の外に目をやった。

「寝覚めの床」は、巨大な花こう岩が木曾川の激流に刻まれてできた自然の彫刻といわれる。中山道・木曾道に「木曾八景」として数えられる景勝地の中で、一番の迫力があるとして有名などころである。その壮大さから列車の窓からも一望できる。ただ、季節は二月、その“自然の芸術”は、雪に覆われている。しかし、それはそれなりに美しい景色として大地の目に飛び込んだ。

「綾部に行く時は、ボーッと見てたのかなあ？ 今はずっともきれいに見えるなあ」
そう思いながら、流れゆく風景に目を向けていた。

木曾福島を過ぎてトンネルに入ったところでイヤホンをはずし、思い出したようにカバンから「生きがいの探求」を取り出した。裏表紙を見ると、短い詩が書いてあった。

天地は毎日かわる

晴れくもり寒くあたたかく

日が出たり月がでたり

闇になったり朝がきたり

ゆきづまったままの状態が

永久につづくかのように思いなされるな

(本文から抜粋)

「ん、なるほど」

そう思いながら、「本文のどこにあるのだろう」と思いながら、ページをめくっていた。パラパラとめくりながらさがすつもりだったが、何度も手が止まった。五十ページ目の「向上への道」では、松太郎が「好きなお示しだ」と言ったことを思い出して、また読み返してみた。

「やっぱりいいなあ」

そう思いつつ、もう一度裏表紙の詩を確かめ、本文をさがしたが、なかなか出てこない。本の最後の方で短いお示しに目が止まった。

真に神を信じる者は、

真に神を相手としてのみ行動している。

ゆえに、どんな場合にでも

感謝があり、希望があり、安心がある。

大地は、「感謝と希望と安心がある…か。おじいちゃんがそうなんだろうなあ」と松太郎の言動に思いをはせた。と同時に、今の自分にはどうてい難しいことだ、とも思った。

さらにページをめくっていき、ようやく「おわりに」のページにさがしていた詩があった。

「何だ、最後に書いてあったのか」

と思いつながら、その詩の最初から読んでみた。

淋しいでしょう 辛いでしょう

しかし辛棒してください

もう少しです

明けぬ闇はなく

尽きぬ冬はありません

歯を食いしばっても

土にかじりついてでも

どうなりこうなりこの峠を越えてくだ さい

“あだめだ” などとはけっして言わぬ ことです

東でゆきづまったら西へまわりなさい

南がふさがったら北へお逃げなさい

東西南北みなだめでしたら

しばらくそこで臥ねていてください

天地は毎日かわる……

読み終えて、大地は大きく息を吸い、ゆっくりはいた。

よりよき道を求めて

特急「しなの」は、中津川、南木曾を過ぎ、木曾駒ヶ岳を中心とした中央アルプスを右手に、天竜川そして中山道に沿って走る。塩尻から篠ノ井線に入り、列車が松本を出て、聖高原を過ぎたあたりから日が落ちかけてきた。

しばらく走り、姨捨駅の手前にさしかかった。日中なら視界が開け、眼下に千曲川ちくまがわが流れる善光寺平の景観が広がる。さらにスピードを落とし、景色を説明する車内アナウンスが流れる。

姨捨駅は、標高五百五十一メートルの山の中腹に位置し、ここから見下ろす善光寺平は絶景として知られ、日本三大車窓の一つに数えられている。善光寺平はその昔、甲越両軍が十二年にわたり五回繰り返し返したと伝えられる川中島の戦いの古戦場である。ただ残念ながら、もう日没が近く景色の全容は見えない。それでも家々の明かりが点在し、それはそれできれいであった。

午後六時前、長野駅に着いた。ホームに降り立つと雪が舞っていた。

改札を出て新幹線ホーム側にあたる東口に出た。メールで連絡しておいたので、母・

京子が迎えに来ていた。

「ただいま」

大地は後ろのドアを開けて、荷物を座席の上に置きながら言った。

「おかえり」

京子が答えた。

大地はすぐに後部ドアを閉め、助手席のドアを開けて乗り込み、シートベルトを締めた。京子は車を発進させ、駅前の昇降場を出た。

「おじいちゃんたちは元気だった？」

「うん、二人とも元気だったよ」

車のワイパーが雪を払っている。

「今日は、一日降ったりやんだりの天気だったよ」

「そうなんだ」

左右の歩道には、新雪が積もっていた。

「綾部は寒かったあ？」

「寒かったよ。節分大祭の夜も冷えたなあ。こっちは違った寒さのような気がしたよ」
「そうだね、綾部は湿気が多いから、寒く感じるんだよね。大地、おじいちゃんとし

「つかり話が出来たようだね」

「とうか、いろんな話を聞かせてもらったただだよ」

「毎日飽きずにつきあったみたいだね」

「みたいだねって、おばあちゃんに聞いたの？」

「そう、電話でね。大地が熱心につきあってくれたって、感心してたよ」

「なんだ、そうか。あ、でもいろいろ勉強になったよ」

「そう、それならよかった。まあ、二、三日なら大丈夫かなあ」

「まあ、そうだね」

二人は笑いながら話していた。

十五分ほどで自宅に着いた。

「お兄ちゃん、おかえり」

リビングでテレビを見ていた弟の司が声をかけた。

「ただいま」

大地はバックの中から、京都駅で買った土産を取り出し、司に渡した。

「はいこれ」

「おう、ありがとう」

「ちあきは？」

「まだ学校だと思っよ」

「そうか」

と言うと、綾部の祖父母にお礼の電話を入れてから、二階の自分の部屋に上がった。荷物を置いて、ベッドに寝転んで背伸びをした。

「あゝ、やっぱり家は落ち着くなあ」

久しぶりにそう思った。

長野でオリンピックが開催されたのは、一九九八年だった。この二十世紀最後の冬季オリンピックでは、日の丸飛行隊と言われたジャンプ陣をはじめとする日本選手代表勢が大活躍した。冬季五輪史上初の二桁となる合計十個（金五・銀一・銅四個）のメダルを獲得した。九歳だった大地も、あの当時の活気あふれる長野のにぎやかさをおぼえている。

それから十二年たった今（二〇一〇年）、スキーやスケートなどのウインタースポーツ熱は下火になっている。県内各地のスキー場も以前のような人出ではないようであ

る。全国的に景気が低迷する中、長野も同じような状況になっていた。その影響は、今年大学を卒業する大地たちの就職活動にも暗い影を落としていた。

綾部から帰って以降、大地は毎日のように就活に歩いた。一社、食品関係会社の内定はもらっていたものの、あまり気乗りがせず、新たな就職先を探していた。

そんな時、長野市内のタウン情報雑誌の会社の面接を受けることになった。

呼ばれて入った部屋には、二人の男性が待ち構えていた。指示されたように椅子に座り、面接を受けた。

「うちを受けたいと思った動機は何ですか？」

一人の男性がたずねた。大地は、自分の思いをとつとつと話した。しゃべり終わった時、その男性は、険しい表情になった。

「君は何をあせているんだ！」

厳しい口調であった。卒業までに就職をとあせていた大地の心を、すっかり見透かされての言葉だった。

「動機が不純だ、何のための仕事だ。これからの人生、君は何をしたいんだ。まったくあせることはないじゃないか。もう一度、君の目標が何なのかしっかり考えなさい。」

もしその目標にうちの会社がかなっているのなら、その時はまた来なさい」

その通りであった。周囲の目を気にして、「とにかく卒業式までには就職先を決めていなくてはならない」と、その事だけが頭にあり、人生の目標などさほど考えていなかった。面接員から叱咤しつた激励され、大地は迷っていた気持ちが吹っ切れた思いになった。正直、ありがたいと思つた。

夕方、大地は自宅に帰り、自分の部屋で面接員の言葉を思い返していた。

「神さまからいただいた言葉かも……」

素直にそう思っていた。

ふと、机の上に置いていた『生きがいの探求』に目がいった。手に取ると、松太郎の顔が浮かび、綾部で聞きたいいろいろな話が思い出された。

「おじいちゃんの話聞いて、この本をもらっているながら、自分の心は何にも変わっていないかったんだ。情けないなあ」

と思ひながら、無造作に開いたページの一節に目がいった。

自分がつまらなく思えたときは、ひじょうに進歩したときだ。

今のわれと理想のわれとは違う。今のわれは臨機応変のものであり、理想のわれは一定不変のものである。

人はつねに理想のわれによって導かれ、今のわれによって動いているのである。両者は、ときに、矛盾むじはんしているように思われることもあるがそうではない。

理想を見つつ現実をはなれず、しかも現実を一步步つ向上させねばならぬ。

永遠を仰ぎつつ現在をはなれず、しかも現在を一步步つ向上させねばならぬ。あせつてはいけない。油断をしてはいけない。

突破！ 突破！

すべてに現状を突破して、一路向上すべし。

よりよき道が、求めさえすればいくらでもあるのに、変な横道へはいつて、強しいて、それで満足してはならない。

人間は心的にも体的にも、だれたらおしまいだ。いつも緊張していなければ向上はない。

「んん、なるほど、その通りだなあ」

大地は、もう一度読み返した。

「よりよき道が、求めさえすればいくらでもあるのに、変な横道へは行って、強いて、それで満足してはならない……。今日のあの人が言ったことに通じるなあ」
そう思った。

翌日、朝食の後に京子から、

「今日、時間ある？」

と聞かれた。

大地は、

「あるけど」

と答えた。

「なら、ちよつと行つてくれない？」

「どこへ？」

「おぶせ小布施まで」

「小布施？ 小布施のどこ？」

「町村さんとこまで、届けたいものがあるのよ」

「ああ。わかったよ」

「ありがとう、じゃあ、後でお願いね」
「はーい」

大地は、気のない返事をした。

み手代

しばらくして、京子が手提げ袋を持ってきた。

「大地、これをお願いね」

と差し出した。大地は、

「わかった。で、これ何？」

「このあいだ、町村さんからリンゴをたくさんいただいたのよ。そのお礼で、ちょっとしたお菓子なんだけどね」

「わかった。じゃあ、車を借りるね」

「はい、お願いね」

大地はすぐに着替えを済ませて、玄関に向かった。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい、気をつけてね！」

京子の声を背に、大地はガレージの車に乗り込み、預かった荷物を助手席に置いて家を出た。アップルラインと呼ばれている国道十八号線を小布施おぶせに向かい、北へと走った。

長野市内から小布施まで、長野電鉄を利用することもできるが、それぞれの駅までの距離を考えると車が便利である。

長野電鉄は、長野駅から奥信濃の湯田中温泉を結ぶローカル線で、北信五岳を望みながら走る風情ある路線である。電車は、途中リング畑の中をすり抜けるように通るポイントもあり、秋から冬にかけて、リングがなっているところを初めて見る観光客には人気がある。

大地は十五分ほど車を走らせ、千曲川を渡り、小布施の町に入った。栗と北齋の町”として、テレビや雑誌で紹介され、全国的にその名が知られるようになった小布施は、二十年ほど前から”町並み修景”を手がけてきた。観光客も年々増加し、平日でも散策する観光客でにぎわい、土日・祝日ともなると、町は人であふれかえっている。しかも、「癒された」、「また別の季節にきたい」などと、リピーターが多いのが、小布施の特徴でもある。

「今日も人が多いなあ」

そう思いながら栗菓子で有名な小布施堂前を左折した。北齋館などがある修景地区から東に入ったところに、町村家がある。ここには子供のころから何度も来たことが

あった。大地は家の前庭に車を入れ、京子から預かった手提げ袋を持って降り、玄関の呼び鈴を押しした。

「はい」

中から女性の声が出て、玄関の戸が開いた。

「こんにちは、雨宮です」

「あらあ、大地君。ひさしぶりね」

町村家の主婦・恵子で、母・京子とは大本を通じての友人であった。

「お久しぶりです」

「いらつしやい。今日はどうしたの？」

「あの、母からの届け物がありました」

と言いながら、大地は手提げ袋ごと差し出した。

「あら、何かしら」

「先日頂いたリングのお礼にということでは……」

「そんな気を使わなくていいのにねえ、京子さんは律義なんだからあ」

「あ、いや、ほんのお口汚しです……」

「ありがとうございます。じゃあ、遠慮なくいただきます。さあ、上がって。時間あ

るんでしょ」

「あ、まあ」

恵子にうながされるまま中に入った。

大地はリビングのソファに腰を下ろしてから、周囲を見回した。掃除が行き届き、きれいに片付けられていた。ほどなく、恵子がお茶と野沢菜漬けを運んできた。

ふと気がつくのと、ご神前がある居間の方から、祝詞の声が聞こえていた。

「おばあちゃんがお参りされているんですか？」

「そうなの」

おばあちゃんとは、恵子の義母・音江のことである。

「いつもこの時間には、知り合いの人たちのご祈願をしているのよ」

「ご祈願？」

「病気の知り合いだったり、入院しているおばあちゃんのお友達が早く良くなりますようにって、神さまにお願いしているのよ」

「そうなんですか」

大地は、祝詞の声ができる方を向きながらうなずいた。

「さあ、お茶をどうぞ」

「いただきます」

大地は、お茶をすすつてから、野沢菜漬けをつまんだ。

「うまい！」

屋外に置いた漬け物樽ぶから上げた冬の野沢菜漬けは、少し凍っていて歯ごたえがあり、絶品である。

しばらくして音江がリビングに入ってきた。

「おばあちゃん、こんにちは」

「おや、雨宮さんとこの大地君。いらつしやい」

「おじゃましてます」

「よく来なすつたねえ」

そう言いながら、音江は大地の向かいに腰を掛けた。

「今日はどうしたの？」

「母の使いで来ました」

「リンゴのお礼に、お菓子をいただいたのよ」

恵子が言葉をはさみながら、音江の湯呑みと急須、切り分けたリンゴを持ってきた。

「かえって気をつかわせちゃったわねえ」

「いいえ、三田農園のリングゴはホントにおいしいんで、うちでも大人気です」

「お隣の三田さんは、こだわりの農家で、せかしても、おいしくなるまでは売ってくれないからね」

「へえ、すごいですね」

大地は感心したように言った。

「そういえば、京子さんに聞いたんだけど、大地君、節分大祭にお参りしたんだって？」

恵子が思い出したようにたずねた。

「はい、母にすすめられて綾部まで行ってきました」

「どうだった？」

恵子はそう聞きながら、急須のお茶を大地の湯呑みにつき足した。

「いや、初めてお参りしたんですけど、厳かで、すがすがしかったですよ」

「そりゃあよかった。松太郎さんたちも喜んだらうね」

音江が言った。

「はい、おじいちゃんともゆっくり話ができて、大本のことをいろいろ教えてもらいました」

「松太郎さんも、熱心だからねえ」

「そうですね」

大地は笑いながら答えた。

大地の祖父・松太郎と音江は同じくらしい歳のようで、以前から聖地で時々顔を合
わせていたとのことだった。

「ところでおばあちゃん、今、神さまにご祈願をされていたそうですね」

大地は音江にたずねた。

「病気の知人に、おかげをいただいてほしくって、ご祈願をしたり、遠隔お取次ぎを
させてもらっているのよ」

「遠隔お取次ぎ？」

「離れたところにいる人に対して、み手代^{てしろ}お取次ぎをさせていただくのよ。大地君も
お取次ぎを受けたことあったよね。こうしてみ手代を持って、神言を奏上して……」

音江は、右手を軽くにぎって前に出してお取次ぎの格好をしながら言った。大地は
少し考えて、思い出したように答えた。

「あつ、そういえば、子供のころ、おばあちゃんにしていた記憶があります。」

なんだか気持ちが悪かったことだけは、うっすらとおぼえているんですが……」

「小さいとき、大地君は喘息ぜんそくだったよね。今は大丈夫なの？」

「はい、もう治りました。その節はお世話になりました」

「確か、おかあさんといっしょにうちに来ていた時に、具合が悪くなって、その時にお取次ぎをさせてもらったんだね」

「そうですね。小学校の三、四年生のころだったと思います」

「そうそう」

音江は、なつかしそうに言った。

「おばあちゃん、あのころはまったくわからなかったんですが、み手代お取次ぎって、そもそもどんなものなんですか？」

大地は興味深げに聞いた。

音江は、「それならば」と、ご神前にもどり、み手代を手にリビングに戻ってきた。

「これが、み手代でね、〴〵救いの神器しんぎ」なの。これを救いの神さまである、〴〵瑞みづの御霊みたまさまの御手みての代わりとして使わせていただくので、手の代わりと書いて、み手代というの。もともと、〴〵手代〴〵というのは、代わって仕事をすることや、代理という意味が

あるのよ」

「なるほど、神さまの代理ですか」

「それで、こうなっているのよ」

と、錦の袋からみ手代を取り出した。

「えっ、それって杓文字しゃもじみたいですね」

大地は驚いたような口調で言った。

「そう見えるでしょう。でもね…」

音江はそう言いながら、み手代の正面を大地に向けた。

「渦巻きのようなものが書いてありますね」

「そう、渦は水。水は瑞の御霊、救いの神さまを表しているの。これは三代教主さまがご染筆になったものだけど、歴代の教主さまが、神さまにご祈願し神霊しんれいを込められながらお書きになったものなのよ。時代によってお歌であったり、御神名であったり、それから裏にもご染筆があったりするんだけど、どれも救いの神器にはかわりないの」

「そうなんですか。でもなぜそんな形をしているんですか？」

「それはね…」

音江は目を輝かせながら話を続けた。

み手代お取次ぎ

「大地君が言ったように、確かにご飯をよそう杓文字しゃもじの形だね」

「そうですよね」

「杓文字は、別の言い方だと何というかね？」

「えっ、あ、なんだろう？ たぶん：杓子しゃくしかな？」

「そう、杓子だね。じゃあ、杓文字と杓子の違いは知ってる？」

「え、同じじゃないんですか？」

「もちろん同じ意味なんだけど、杓文字は杓子しゃくしのにようぼうごじは“女房詞”なのよ」

「女房詞？」

「昔、宮中に仕える上級女官を“女房”と言っていたんだけどね、室町時代ころから、その女官たちが女らしさをあらわした言葉を“女房詞”と言ったのよ。特に衣食住に關わるものを言い換えたそうよ。まあ隠語みたいなものだったのね」

「へえ、そんな言葉があるんですね」

「後世になると、そのことばが將軍家に仕える女性から、町家の女性にまで広がっていったそうで、たとえば、寿司は“おすもじ”、饅頭まんじゅうは“おまん”、浴衣ゆかたは“ゆもじ”

というようにね。特に、杓文字のように、語尾に“文字”をつけるものは、“文字ことば”とも言うそうよ」

「おばあちゃん、詳しいですね」

「まあ、大地君より歳をとっているからね」

音江は、ちゃめっ気たっぷりに笑いながら答えた。

「で、どうしてみ手代つてそんな杓子の形をしているんですか？」

「それが肝心のことだったね」

「はい」

大地も笑いながら言った。

「それならみ手代の由来から話さないといけないね」

「お願いします」

「確か大正十二年だったと思うけど、聖師さまが熊本県の小国という里にご巡教に行かれたそうなの。この小国には杖立温泉つえだてという湯治場とうじばがあつてね。平安時代の初めのころ、旅の途中で訪れた弘法大師・空海がこの温泉の効能にとつても感銘したそうよ。そして持っていた竹の杖つえを立ててみたところ、節々から枝や葉が生えてきたので、

それが杖立温泉の名前の由来になったそうなの」

「おもしろい謂れですね」

「ほかに、杖をついて湯治にやってくる病人や老人も、帰るころには元気になって、杖を忘れるという、温泉の靈験をたたえた由来もあるそうよ」

「なるほど、杖を立てて帰るといふことですね。じゃあ、聖師さまもこの杖立温泉をお気に召されたんでしょね」

「そうだったと思うね。実際、とても良いところよ」

「おばあちゃん、行かれたことあるんですか？」

「一度だけね。もう十五年以上前になるかね、確か、聖師さまがご巡教になってから七十周年の時だったね」

「そうですか」

「そのご巡教中に、聖師さまがご自身の誕生日を迎えられたので、その時に、小国名産の竹の杓子に歌をしたためられたということなの。」

杓子の表には、

萬有之身魂をすくう古の杓子

心のまゝに世人す九へよ

というお歌、そして裏には、

この杓子わが生れ多る十二夜の

月のかたち尔よくも似し可南

とご染筆して鎮魂されたそうなの」

「その実物は今でもあるんですか？」

「最初のものかはわからないけど、小国の信者さんのところには、その当時のものが残っているのよ」

「へえ、すごいなあ」

「聖師さまは、その竹の杓子をたくさん持ち帰られ、信者さんへのお土産としてお下げになったそうで、それに同じように、

万有の生命をすくふ此釈子

心のままに世人救へよ

というお歌とご署名、母印が押されてあって、これを使って救いのご用にお仕えるようにご指示されたそうなの」

「それがみ手代の始まりなんです。だから今でも杓子の形をしているわけですね」

「そういうことなの」

「あのく、でもどうして母印を押されていたんですか？」

「それはね、聖師さまの母印は特別な形をしていて、押されたのを見たら誰でもわかるんだけど、◎（ス）の形をしているの。でも、大地君、＼ス＼ってわかるかなあ？」

大地は首を傾けて少し考え、思い出したように言った。

「あつ、それならわかります。綾部でおじいちゃんから神さまの歴史の話を聞いた時に教えてもらった、○に点のスの言霊のことですね」

「へえく、驚いた。そう、聖師さまが押された母印は、ちょうど○の中に点があるような形なのよ」

「一点のホチですね。すごいなあ」

「大地君、よく知ってたね、感心だね」

「いやく、おじいちゃんから太古の神さまのご因縁をしっかりと聞かせてもらいましたから」

と少し照れくさそうに笑った。

音江は、リビングに掛けてあった、聖師さま書の短冊を指さし、

「あのお作品の下に聖師さまの王仁というご署名と母印があるでしょ。あれがそうよ」

と言った。

「あ、あれですか」

と言いながら大地は短冊の前に進み寄り目をこらした。

「同じような短冊はおじいちゃんの家のご神前にもあったけど、あの時はこの母印がスの形をしているって気づかなかつたなあ。おじいちゃん、教えてくれればよかつたのに」

そう言いながら、またソファに腰掛けた。

「それでみ手代のことだけどね」

と、音江が話を戻した。

「最近ではあまり言わなくなつたけど、杓子というのは、一家の主婦の座や権利を表しているのよ」

「へえ、そうなんですか？」

「もつと言うと、一家の経済上の権利の受け渡しのの代表が杓子だったの。それで、一家の跡継ぎが結婚して嫁をもらうと、いずれしゅうとめ姑がその権利を嫁に譲るわけね。姑が嫁に世帯をまかせることを、杓子を渡す」といったものなの。だから杓子を渡した後は、

飯を嫁に盛もらせたということ。命の元である食物を盛るために、主婦の権利として重要視されたのが杓子だったわけ」

「杓文字にそんな深い意味があつたなんて、知らなかったなあ」

大地は感心しながら言った。

「まあ、もつとも今、そんな気持ちで杓文字を持つ女性も少ないだろうけどね」

「そうですよね」

「私も、まったく知らなかったわ」

そう言いながら、恵子が切り分けたリングゴを器に入れてリピングに入ってきた。

「杓文字にそんな謂れがあるなんてビックリよね、大地君」

器とようじをテーブルに置きながら恵子が言った。大地もそれに答えた。

「まったくです。僕らの年代だったら知ってる女性はほとんどいないんじゃないですか」

「だよね」

恵子はうなずきながら、台所に戻っていった。

大地はお茶を飲んで、湯飲みを置いた。するとすかさず音江が大地の湯飲みにお茶

を注ぎ足した。どうも音江は大地のお茶が減ると、すぐにつき足すようで、さつきからすぐに湯飲みのお茶が満たされている。おのずとお茶の色も薄くなってきた。

急須を置くと、音江は話を続けた。

「そんなことで、当初は杖立土産の杓子のように竹の杓子だったんだけど、その後は、白木の杓子になって、代々の教主さまが神霊をこめられてご染筆なさって、大本の宣伝使にお下げくださるようになったのよ。そして、心身の病の人に、このみ手代を通して神さまのみ光を受けておかげをいただいてもらう、そういうご用にお伝えさせていただくの。それが大本の宣伝使の務めでもあるのよ」

「だから、僕が子供のころ具合が悪くなった時に、おばあちゃんがみ手代お取次ぎをしてくれたんですね」

「そうよ。み手代は本当にありがたいのよ。それからね、み手代発祥地の杖立には、温泉街から少し山手に登ったところに“み手代歌碑”というのが建っていてね」

「へえ、み手代の歌碑もあるんですか。やっぱり杓文字の形をしているんですか？」
「さすがに杓文字の形じゃなかったね」

音江は大地の質問に笑って答えながら、話を続けた。

「私が杖立に行った時は、聖師さまのご巡教七十周年とあわせて、その歌碑の建立三十周年の記念大祭が、歌碑の前で行われたのよ。歌碑の後ろには、幾筋もの水が流れ落ちる白糸の滝というのがあって、とてもすてきなところなの」

「そんなところにあるんですね」

「それでね、その大祭の後に、ご臨席になっていた四代教主さまが、ごあいさつでおっしゃったことが、私はとても印象に残っているのよ」

「どんなお話だったんですか？」

「最初に、手のひらからエネルギーが出ていくということを科学的に証明しているテレビ番組のことをご紹介になったの。そして、手のひらから出るエネルギーを使って病気なおしをしていた人から聞かれたことを紹介されたの」

「どんなことですか」

「手のひらでするお取次ぎでは、相手の人はおかげをただかれるけど、何人も相手している、逆に自分の体力をすごく消耗してしまうそうです、っておっしゃってね。だから大本では、み手代というご神器をいただいているから、宣伝使は自分の体に負担をかけることなく、お取次ぎをさせていただけるから、とてもありがたいですよ、と教えていただいたの」

「なるほど、そういうことがあるんですね」
大地は感心したような表情でうなずいた。

み教えに『明従』

「私たち大本の宣伝使は、こんなすばらしい『神器』をいただいているんだから、できる限り、み手代を活用して、神さまのみ救いのご用のお手伝いをさせていただかなくちゃ申し訳ないのよ」

音江は、生き生きとした表情で言った。大地は「すごいなあ」と感心しながら、音江にたずねた。

「おばあちゃんはどうして、そんなに積極的な気持ちになれるんですか？」

音江はひと呼吸おいて答えた。

「ありがたいからよ」

「ありがたいから？」

大地は音江の答えを繰り返した。

「そう、ありがたいから。大地君、この年になるとね、こうして毎日元気に暮らさせていただいていること自体が、とつてもありがたく幸せなことだと、心から思えるようになるのよ。そしてね、それが自分一人の力じゃなくて、家族や周囲の人たちの『おかげ』だということを実感するようになるの。そのうえで、いちばんありがたいのは、

いつも神さまの “おかげ” をいただいているということを、しっかりと感じられるようになるからなのね」

「そうなんですか。でも、おばあちゃんがおっしゃることは、僕も頭では理解できるんですけど、まだ、実感としては……」

「そりゃあそうよ、大地君の年齢で私と同じ気持ちになってもらっちゃあ、できすぎだからね」

音江は笑いながら言った。

「ですよね」

「でもね、ただありがたいだけじゃないのよ」

「と言いますと？」

大地は興味深げに聞いた。

「私たち大本信徒は、とても広くて深いみ教えをいただいているということなの」

「ああ……」

大地は、目の前のこの人が、祖父・松太郎と同じような信仰の持ち主なのでは、と思いつつ言葉を返した。

「実は、節分大祭のあとで、丸二日くらい祖父から大本の教えについて、いろいろと教えてもらったんです」

「そうかい、そりゃあ良かったね」

「はい」

「で、どんなことを聞いたのかい？」

「大本がなぜ出現したのか、神さまの歴史はどんなものだったのか、それから、霊界の实在やみたままつりの大切さなんかを聞かせてもらいました」

「ほほお、そりゃあたくさん勉強したんだね」

「あ、いや、全部おぼえているわけじゃないですけどね」

「一回で全部理解できたら天才だよ。大本の教えは、けっこう深いから、何度も聞いた方がいいんだよ。それに同じことでも、年齢によって受け取り方も変わってくるからね」

「そうなんでしょうね」

「信仰は、ただありがたい、ただ教えがすばらしいと思うだけでもいいかもしれないけど、でも、もっといいのは、しっかり教えを理解して、それを生活の中で実践することが大切だと思うのよね」

「そうでしょうね。祖父の話を聞きながら、僕もそう思いました。まあ、少しだけですけど…」

「聖師さまは、信徒の心得の一つとして、み教えに対しては、**盲従**、^{もっじゆう}するのではなくて、**明従**せよ」とおっしゃっているのよ」

「明従？ そんな言葉があるんですか？」

「たぶん辞書にはない言葉だと思うけど、盲従に対しておっしゃった言葉じゃないかなあ？」

「なるほど」

「教えの意味を知らず、理解もせずただ従うだけじゃなくて、その意味をしつかり知り、^あ明りやかに、理解し、できる限り自分の生活の中で、実践することの大切さをお示しになったことだと思うの」

大地は無言でうなずいた。

「大地君は、大本の祝詞は知ってる？」

音江がたずねた。

「はい、節分大祭でも神言かみことを何回か奏あげました」

「そう、じゃあ」

と言いながら、音江はソファを立ち、リビングを出て、しばらくして手に『おほもとのり』を二冊持ってもどってきた。

「これは知ってるよね」

と言いながら、音江は大地に『おほもとのり』を一冊手渡した。

「はい、知っています。祖父の家では、いっしょに朝拝と夕拝をしましたので、その時にも、これを見ながら祝詞を奏あげました」

「そうだったのお。大地君のおうちにはまだ神さまと祖霊まじさまはお祀りまつしてないから、ふだんは朝夕拝はすることがないものね」

「そうなんです。母だけが大本信徒なので、今のところお祀りしていません」

「いずれお祀りできたらいいねえ」

「そうなんでしょうね。母とそのことについて話をしたことがないんですけど、そう願っているのかもしれない」

「そうね、京子さんはそう思っているでしょうね」

確信しているかのような口調だった。音江は、『おほもとのり』を開きながら、「そ

れでね」と言いながら話を続けた。

「朝拝と夕拝で、奏げる祝詞の違いはわかるかなあ？」

「えーっと」

大地も『おほもとのり』をめぐった。

「最初に天津祝詞あまつのりを奏げてから、確か、朝拝が感謝祈願詞みやびのことば、夕拝が神言かみことでしたね」

「そうね。じゃあ、どうして朝拝が感謝祈願詞で夕拝が神言かわかる？」

「あつ、いや、それはわかりません」

と言いながら、大地は心の中で、「ふだんやってないことだから、わかるわけないよなあ」と思っていた。

「そうね、ふだんお参りをしてないんだから、わからなくて当然よね」

「は、はい」

音江の言葉に、大地はドキッとした。

「でも、理由や意味がわからないで奏上するより、理解して奏げてるほうがよくない？」

「そうですね。盲従めくらより明従あきらの方がいいですよね」

さつき教えたばかりの言葉を使つての大地の返答に、音江は苦笑いしながら答えた。

「そうねえ。それからもう一つ、基本的に祝詞奏上で大切なことがあるのよ」

「何ですか？」

「それはね、清らかな心でもって祝詞を奏げるということ。これを忘れたらいけないのよ。祝詞というのは、もともとは書かれたものではなくて、発声された言霊ことばたまだったの」

「あの最初の○^スの言霊のようですか？」

「そう。天津祝詞も神言も、後世文字になり、人が読めるようになったものなのよ」

「なるほど、最初に音があつて、あとで文字にされたということですね」

「そういうことね。そして祝詞は、人が神さまにむかつて申し上げる言葉で、善言美詞、つまりとてもきれいな言葉でつづられているの。だから、祝詞を奏げる人の心も清らかであることが必要なのね」

「お言葉を返すようですが、人はいつも清らかな心ではられないんじゃないでしょうか？」

「そうね。イライラしたり、ムシャクシャしたりする時だつてあるものよね。私もそんな時があるもの」

「じゃあそういう時は、お参りしたり、祝詞を奏げない方がいいんですか？」

「いえ逆よ。そんな時こそ祝詞を奏上した方がいいのよ」

「え、だって、清らかな心で祝詞を奏げることが大切じゃないんですか？」

大地は音江が言っていることが矛盾するんじゃないか、そう思いながらたずねた。音江は平然とした態度で答えた。

「そう、清らかな心でもって奏げるのが大切なんだけど、心がそういう情態じゃないなら、少しでも早く清らかな心に戻すために、お祓いの力のある祝詞を奏げて、心を整えるわけなの。天津祝詞も神言も、清めの言霊で、お祓いの力があるのよ」

「そうなんですか？」

「大地君」

音江は少し間をおいてから、リビング入り口の方に目をやりながら、話しを続けた。

「このドアの下の床が、黒ずんで汚れていたとするよね。大地君ならどうする？」

「まあ、たぶん雑巾で拭くかな？」

「そうね、それできれいになるよね。でも、その雑巾が汚れていたらどうする？」

「バケツに水をくんで、よく洗ってから拭くと思います」

「そうだね。イライラした心と祝詞は、それと同じことなのよ」

「??？」

「つまりね、汚れた雑巾がイライラした心。バケツの水が祝詞ということなの」

大地は腕組みをして少しの間考えた。

「ん、そういうことですか。あのお」

大地は半分納得していない表情でさらにたずねた。

「汚れた床は何に当たるんでしょうか？」

「床は、その人が接している世界よ。ドアの下の汚れは、ほっておいても人が通るたびに歩く人の靴下で拭かれて徐々に薄くなるかもしれない。でも、靴下も汚れるし、あまり良い方法じゃないと思うのね。それに、ひどい汚れだったら、むしろ広がるかもしれないでしょ。だから、少しでも早いうちに、そして丁寧に清らかな雑巾で拭くことが必要だと思うの」

「なるほど」

今度は大地の声も少し大きくなり、しっかり納得しているようにみえた。

「清らかな心になるように、祝詞を奏げ、その上でさらに、祝詞奏上によって自分自身も、自分の周囲も清めていく、ということですね」

「そう、大地君は理解が早いねえ。さすが松太郎さんの孫だね」

「いやあー」

大地はちよつと照れた。

「で、おばあちゃん、その前の質問のことですが、朝拝が感謝祈願詞、夕拝が神言を奏げる理由は何ですか？」

「そうだったね。じゃあ簡単に説明しようかね」

「はい」

大地は笑顔でうなずいた。

感謝と祈願と誓いと祇い

音江は、大地と自分の湯呑みにお茶をつぎ足し、一口飲んでから話し出した。

「まず、朝拝で奏上する感謝祈願詞は、漢字を見ると、読んで字のごとく、感謝」と祈願の“詞”（ことば）ということ。神さまに対して、感謝の気持ちをお伝えし、その後“祈願”をすることになるのね」

音江の話を聞きながら、大地は、“おほもとのり”を開いて、感謝祈願詞を確かめながらうなずいた。

「なるほど、漢字からするとそういうことですね」

「ところで大地君、お願いごとをするとき、相手が人だったら、どうする？」

「どうする、というと？」

「ただ、お願いするだけかな？」

「お願いの内容と相手にもよるでしょうけど、何らかの援助をしてもらう場合だったら、ちゃんと状況を説明してからお願いすると思います」

「ということは、たとえば、私もこんな努力をしますからお願いますか、とか、私もこんなふうになりたいので力を貸してください、っていうような頼み方になるとい

うことかね」

「そうそう、そうです」

「つまりは、一方的なお願いじゃ申し訳ないということでしょう」

「まあ…、そういうことになります…よねえ」

大地は首をかしげながら、歯切れの悪い口調で答えた。音江は大地の様子を見ながら、さらに続けた。

「人に対するお願いでさえそうであれば、ましてや神さまに対する祈願というのは、もつときちんとしたものだと思うの。だから、祈願は、言葉を代えるとお誓いでもあるんじゃないかと、私は思っているのよ」

音江は、自分の言葉を確かめるような口調で言った。

大地は無言でうなずいた。

「そういう気持ちで祝詞に書かれている『感謝』と『祈願』をするのが、感謝祈願詞で、その『のりと』を毎朝神さまにあげるわけね。で、一日が終わり、振り返ってみると、朝お願いしお誓いしたような結果になっているか、ということが問題よね」

「そうですね」

「もちろん、その日によって結果は違うだろうけど、朝、＼こんな努力をしますからお願います、お力を貸してください、って頼んでおきながら、達成できてなかったら、極端な言い方をすると、神さまとの契約違反ということになるわけ」

「えーっ、契約違反ですか？」

「契約違反は、ちよっとおおげさかもしれないけど、神さまに対しては申し訳ないことでしょう」

「まあ…」

「だから結果的にはそうしたことが、罪や穢れになるわけなのよ」

「罪…、ですか？」

「神さまの目からみた罪というのは、ただ人間的な罪悪ということだけではなくて、悪いことを『包み隠す』ことや、『積み上げ』ていくことなのよ。それから一面では、良いことやできることをあえて実行しないで、『包み隠し』ていることも、大きな罪なのよ」

「へえー、そういうことも罪になるんですか？」

「そうなのよ。それから穢れけがというのは、気が枯れると書いて『気枯れけが』けが』というの。だから、物事に対して後ろ向きになったり、消極的になったりすることも穢れになる

わけなの」

「そうなんですか。僕が思っていた罪や穢れとはちょっと違うんですね」

「そうかもしれないわね。それから、悪いことだと知っていて犯してしまうこともあ
るでしょうし、人には、知らず知らずに犯した罪や穢れもあるのよ。だからこそ、お
祓いの祝詞である『神言』を夕拝で奏上して、一日の罪や穢れを清めていただくの。
これが朝夕拝での、『感謝祈願詞』と『神言』奏上の意味だと思っているのよ」

「つまり、自分のお願いや誓いを立てて、それでもできなかったことに対して、その
罪穢れを清めていただくということですか？」

「そうね」

大地はここでさらに疑問が深まり、少し考えて口を開いた。

「でも、その朝拝の時の感謝とお願いというのは、すでに『のりと』に書いてあるこ
とですよね」

「そうね」

「具体的にはどんなことなんですか？」

「そう、そこが問題で、一番大切なところよね」

「ですよね」

二人は、そろってお茶を飲んだ。

「まず感謝の部分は、元の大神さまが大宇宙に天地を創造されて、この地球上の人類をはじめ、万物を生み育てておられる、その大きな恩恵に対して感謝を申し上げているのよ」

音江の説明に、大地は「おほもとのりと」を見ながら言った。

「この最初の八行分のところの『かしこ恐み恐みもまを白す』、までのところということですね」
「そうよ、とつても広い意味での感謝なのね」

音江は、両手を広げながら言った。

「あの一、元の大神さまというのは一点のほち、から始まる神さまのことですよね」

「あら、大地君知ってるの？」

「綾部でおじいちゃんに詳しく聞きました。スの言霊や国祖・良うしろの金神さま、天地ぼろはん剖判のことなんかも教えてもらいました。あつ、でも全部おぼえているわけじゃないですよ」

大地は笑いながら答えた。

「でも、それなら話が早いねえ」

音江もうれしそうに言った。

「この天地をお造りになった元の大神さまは、私たち人間に神さまと同じ靈魂を与えてくださったのよ。それが一行目にある『ひと、ふた、み、よ、いつ…』という天の^{かずらた}数歌といわれるものの最初の『ひと』でね、漢字では、『一^{いち}靈^{れい}四^し魂^{こん}』と書いてあるでしょ」

「あ、ホントだ。これで『ひと』と読むんですね」

「大宇宙の成り立ちのいちばん最初が『ひと』なのね」

「ということは、五十六億七千万年前の最初のころということですね」

「ああ、その通り、たいしたものね」

「いいえ、にわか仕込みですから」

大地は少し照れながら言った。

「でもその『一靈四魂』を、神さまから私たち人間もわけていただいでいて、それが人の魂なのよ」

「魂ですか」

「魂のことは靈魂といってね、実は一つの靈と四つの魂ということなのよ」

「だから一靈四魂なんですね」

「そう。それに“人”というのは、霊が止まるところだから“霊止”と書いて“ひと”というんだ、と教えられているの」

「なるほど、人にはそういう意味があるんですね。知らなかったなあ」

「人が生まれるときに、神さまから与えられる霊魂の本体を“直霊魂”なほひのみたまというのよ。ほら、次のページにあるでしょ」

音江の言葉に、大地は“おほもとのり”をめぐった。

「あ、あった。『天津神あまつかみより授けたまへる直霊魂なほひのみたまをして』。ここですね」

「そう、そしてこの直霊魂は、勇氣、親しみ、愛情、智慧ちえというような働きを持っていて、それが四魂といわれるものなのよ」

「なんだか奥が深いですね」

大地は、かみしめるように言つて、質問を続けた。

「で、おばあちゃん、肝心の祈願の部分ですけど、どこになるんですか？」

「そうだったね。感謝の部分が終わって次が祈願の部分になるんだけど、最初に誰に向かつてお願いしているかというのが書いてあるでしょ」

「この『天地初発あめつちなりいでしとき之時より隱身すみきりたまひし大天主もとつみおやすめおほかみ太神みまえの御前みまへにまをさく』ってところで

すか」

「そう、天地の元の大神さまに申し上げるといふことね」

「なるほど」

「何を申し上げるかというのと、その後^に続く言葉になるの」

「ということは、『天の下四方の国に生出^{なり}でし青人草^{あをひとぐさ}らの身魂^{みたま}に天津神^{あまつかみ}より授けたまへる直靈魂^{なおひのみたま}をして、ますます光華明彩^{ひかりうる}至善^{はしき}至直^{いただ}伊都能売魂^{いづのめのみたま}と成さしめたまへ』の部分ですか？」

「そうなの。『天の下四方の国』は、地球上のすべての国ということ。『青人草』は、草が生い茂る様子にたとえて、人が増えてゆくことを表していて、私たちを含めた地球上のすべての人々に、ということになるの。そこにいただいた直靈魂を『ますます光華明彩^{ひかりうる}至善^{はしき}至直^{いただ}』『伊都能売魂^{いづのめのみたま}』と成らせてください、というお願いなのよ」

「何だか難しいですね」

「直靈魂の四つの働き、四魂^{しこん}の働きが十分に発揮された完全な状態を『伊都能売魂』
というの」

「……?」

「自分の靈魂も、神さまにより近い靈魂に成らせてください、そう成るように努力し

ます、というお願い、お誓いということになるかな」

「え、そんなたいへんな誓いを立てているわけですか？　こりゃあ、うかつにこの『のり』はあげられないなあ」

「大地君、そんなこと言っちゃだめよ。だって、この伊都能売魂になることが、この世に生まれた人の使命でもあり、大きな意味では、人生の目的でもあるのよ」

「でも、言葉を代えて言うと、神さまと同じになるといふようなものじゃないですか」
「そうね」

「いや、それはかなりむずかしいですよ」

大地は、顔の前で右手を細かく振りながら、尻込みするように体を後ろへそらしていた。

一 靈四魂

音江は大地の様子を笑顔で見ながら話を続けた。

「だからこそ、その『おほもとのりと』の後半に書いてあるような、より具体的なことを自覚するように努力します、ってことなのよ」

「じゃあこのあとが、具体的な事を祈願することになるんですか？」

大地が聞いた。

「そうなのよ。それじゃあ、少しずつ説明しようかね」

「はい、お願いします」

という大地の返事を聞きながら、音江は気がついたように聞き返した。

「ところで大地君、時間はいいの？」

「はい、大丈夫です」

大地は、リビングの置き時計に目をやりながら答えた。

「大地君、ゆっくりしてあってよ」

そう言いながら、恵子がポットと菓子器を持ってリビングに入ってきた。

「はい、ありがとうございます」

「おばあちゃんも、若い人と久しぶりに神さまの話をすっかりできて、いいですね」

「へえ、うれしいね」

二人はニコニコしながら話した。

恵子は急須にお湯を足すと、大地と音江の湯呑みにお茶を注ぎ、菓子器に盛ったお菓子をすすめた。

「はいこれどうぞ。大地君、^{いっさ}「茶まんじゅう」は知ってるよね？」

「はい、俳人の小林一茶ゆかりのおまんじゅうですよね」

「小さくて一口で食べられるのがいいでしょ」

「そうですね」

「じゃあ、たくさん召し上がって」

「では、いただきます」

と、大地は一茶まんじゅうを一つつまみ、口に入れた。

「ん〜、おいしい!」

「でしょ」

恵子はうれしそうな顔をしながら、台所に戻って行った。

大地はお茶を飲み、湯呑みをテーブルに置いて、口元を指で拭く仕草をしながら音江の方を見た。

「おばあちゃん、一茶まんじゅうで思い出したんですけど、確か、小林一茶の『やせ蛙がえるまけるな一茶これにあり』の句は、小布施おぶせで詠んだものでしたよね」

「岩松院がしんよういんでね」

「あ、そうそう岩松院でしたね」

「あそこの庭の『蛙合戦の池』で詠んだのよ」

「そうだ、思い出した！ 本堂の天井に葛飾北齋かつしかほくさいが描いた大きな鳳凰ほうおうの絵があるお寺でしたね」

「そう、あれは北齋が晩年、八十九歳の時に描いた大作よ。たたみ二十一畳の大きさがある鳳凰で、百六十年以上も前に描かれているのに、今でも鮮やかな色彩で、とても立派なものね」

「僕も中学生の時に行ったことがあります。みんなで本堂に寝転がって天井を見上げました。あれはすごい鳳凰ですよね」

「ほんと見事だねえ」

相づちを打っていた大地は、何かに気づいたような口調で言った。

「あれ、話が変わっちゃいましたね」

「おや、そうだね」

「祈願」の具体的な意味を教えてくださいませんか？」

「それじゃあ、話をもどそうかね」

「はい、お願いします」

音江はゆつくりとしゃべり出した。

「感謝祈願詞の『祈願』の部分では、『伊都能売魂と成さしめたまへ』って、大きなお願いをしてから、具体的なことにはいるんだけど、その中でも最初はそのお願いの前提になることを申し上げるのよ」

「前提？」

「『邂逅に過ちて枉津神のために汚し破らるることなく』というところがその前提なのよ」

「ここですね」

大地は、おほもとのりと、の文面を指差しながら言った。

「この『邂逅』ってどういう意味ですか？」

「邂逅というのは普通『かいこう』と読むんだけど、めぐりあうことや、おもいがけなく出会うことなの。よく考えてみると、人生はいろいろな人や状況との出会いや巡り合いによって、その人の道を歩むことになるものなのよね」

「そうかもしれませんね」

「友人や師匠、男女の出会い、それからいろんなチャンスとの巡り合い、芸術や宗教との巡り合いもあるかな」

「なるほど」

「でも、どんな人や機会に出会うかは、私たち人間には予想できないものよね。だから幸せになるのも、不幸に見舞われるのも、ある意味この『邂逅』次第かもしれないでしょ」

「そうですね。車を運転していて、『もしあと三秒早く交差点に入っていたら、たいへんな目にあっていたかも』、とかいうことがありますよね」

「歴史に『もし』ということはないというけど、ほんのちよつとの時間差がその後の人生を大きく左右するということはあるものなのよね。私のように長く生きているとそんな経験は何度かしているのよ」

「そうですね？」

「でもね、邂逅がすべて良い方に動いたらいいんだけど、そのことをきっかけに物事が悪い方へ悪い方へ進んでいくこともあるのよ。そういうことを『邂逅に過ちて』というの。で、そうしたことは枉津神…、別の言葉で言うと、魔神や悪神の仕業の場合があつて、それによつて人が不幸に陥れられてしまうことがある、といわれているのよ」

「悪い神によつて、ということですか？」

「そうですね。讚美歌の中にも、『世人の智慧は賢しくも この世をのろふ魔神の 醜のたくみは悟り得じ』（『大本讚美歌』第三）という一節があるんだけど、世の中をのろふ悪神によつて、人生の落とし穴はいたるところにかくされていて、智恵のある人でもさどることが難しい場合がたくさんあるということなのよ」

「恐いですね」

「だから大前提として、まずそんな悪い巡り合いに遭遇しませんようにお守りください」

「ってお願いするわけね」

「なるほど、最初から落とし穴に落ちたんじゃあ、元も子もないですからね」

大地は納得したような表情でうなずいた。

「その上で、次の『四魂と五情の全き活動によりて、大御神の天業に仕へまつるべく』となるのよ」

「この四魂というのは、一霊四魂の四魂ですか？」

大地は、のりとの文字を追いながら言った。

「そうね」

「じゃあ、五情というのは？」

「それは、一霊四魂の働きのことなのよ」

「働き？」

「四魂のそれぞれの名前は、荒魂、和魂、幸魂、奇魂というんだけど…。ほら、そののりとゝの次のページをめくったところにあるでしょ」

という音江の言葉で、大地は「おほもとのりとゝをめくり、文字を目で追った。

「あ、ありました。『荒魂の勇みを振起し…』、それから『和魂の親みによりて…』。えーと次が『幸魂の愛深く…』、それから、『奇魂の智によりて…』。この四つですね」

「そうそう。今、大地君が読んだところの四魂のそれぞれの下の言葉が、四魂が司る働きのね」

「というと、この、勇み、親しみ、それから愛と智ということですか？」

大地は一つ一つの文字を確かめるようにゆっくりと言った。

「そう、四魂が司るのが、その『勇・親・愛・智』というものね。そして、五情というのは、『のりと』にも書かれているけど、それぞれの魂の働きである、『恥じる心』、『悔いる心』、『畏れる心』、『覚る心』なのよ」

「恥じる、悔いる、畏れる、覚る…ですか？ あれ、五情だったら一つ足りないですよね」

「そうね。実はもう一つは、四魂の本体である直靈魂なおひのみたまの『省みる』かえりという最も大切な働きの」

「なるほど、それで五つになるわけですね。つまり、これで一霊四魂の働きということですね」

「そういうこと。省みる、恥じる、悔いる、畏れる、覚る。これを五情というの。ちよつと難しくいうと、『五情の戒律』かいろつともいうのよ」

「おばあちゃん、あまり難しくない方をお願いします」

大地は苦笑いしながら言った。

「あら、ごめんなさい。じゃあ、その先ね。四魂と五情の完全な働きによって、『大御神の天業おほみかみに仕へまつるべく』、つまり、神さまがなさるお仕事…大本ではこれを

ご神業しんぎょうというんだけど…：このご神業にお仕えすべく、つていうのが、ここの意味になるのよ」

「はあ？」

「そして、ご神業にお仕えするために、その次の部分が続くわけね」

「ちよつと待つてください。ということは、ちゃんとその…ご神業にお仕えできるところにしてください、つてことが神さまへの祈願だということですか？」

「あら大地君、察がいいねえ」

「ん、何だかまた、むずかしいお願いですね」

大地は首をひねりながら言った。

「まあ、今、あまりむずかしく考えないで、全体の意味を理解してから、ゆっくり考えた方がいいんじゃないかな」

「そうですね」

「じゃあ、次ね」

「はい」

『『忍耐勉強よくたへしのびもつて』からの三行の文章は、漢字の意味を考えると、かしこい大地君な

らだいたい理解できるとおもっけど…」

「そうですか？ え〜つと」

大地はまた“おほもとのりと”に目を落とした。

すべての事業をなすにも

「忍耐勉強もつて尊き品位を保ち、玉の緒の生命長く、家門高く富榮えて、美し天地の花となり光となり、大神の御子たる身の本能を発き揚しめたまへ」

と、大地は言葉を確かめるように、声に出してゆっくり読み終えて言った。

「神さまのご神業にお仕えるために、このお願いをするんですよね。ということは、ここに書いてある五つのことを神さまに頼んでいるんだと思います」

音江はニッコリしながら、

「さすが、大地君。で、その五つは？」

「まず、『忍耐勉強もつて尊き品位を保ち』ですね。忍耐と勉強だから、耐えなければならぬことはしつかりがまんし、よく勉強して、高い品位を落とさないように、ということでしょうか？」

「はい、その通り。ただ、忍耐というと、普通は何が何でもがまんするというふうに受け取りがちだね」

「えっ、そうじゃないんですか？」

「無理のない『忍耐』もあるのよ」

「そんなの、あるんですか？」

「あるのよ。それはね、慈悲心や同情心だと聖師さまが教えておられるの。他を心から慈しみ、哀れむ広い心を持つていけば、感情を無理にがまんすることはないからね。つまりは『愛』や『思いやりの心』を持つことによつて、自然と尊い品位が生まれるんだと思うのよね」

「ん、そうですね、理屈ではわかりますが、なかなか簡単ではないですよね」

「そうかもね。はい、次は？」

「二つ目は『玉の緒たまをの生命いのちなが長く』とあるので、健康で長生きさせてください、ってことかなあ？」

「そうですね。『玉の緒の』というのは、命の枕詞まくらいことばだから、全体で生命ということになるね」「枕言葉ですか」

「緒というのは、ものともものつとを結びつける意味があるのよ。ほら、『へその緒』とか、ゲタの緒』とかいうでしょ」

「そうですね」

「玉の緒の『玉』というのは魂のことだから、『玉の緒』は、魂と肉体を結びつけてい

るパイプのようなものなのよ。＼その緒＼は、胎児と母体とをつなぐものでしょ。人がこの世に生まれ出たら、＼その緒＼を切るけど、人は生きている間は、魂と肉体が＼玉の緒＼でつながっていてね、それが切れた時、霊界に旅立っていくの。この世で生きている間は、＼玉の緒＼を通じて霊的な気を受けて、肉体の健康を保っているのよ。だからパイプがつまると健康にもよくないわけ。できるだけ＼玉の緒＼を、太く強くし、いつも清らかに保つことが大切なのよ、大地君」

「そうなんですか。ということは、＼玉の緒＼が細く弱く、汚れていると、肉体的にもよくないということですね」

「そういうことね。で、このことは、人間の感情や精神状態に左右されるものなのよ」
「感情に…ですか？」

「たとえば、怒る＼は、緒凝る＼という意味で、『玉の緒』が強く凝った状態のことなのよ。それから、怯える＼は、緒冷える＼ということ、魂が冷たくなっている状態ね。恐れる＼は、緒逸れる＼。驚く＼は、緒轟く＼、というふうに、精神が不安定な状態になるのね。だから、人は、できるだけ心を柔らかく、温かく、平常心を心がけることが、健康上も大切なことなのよね」

「なるほど、おもしろいですね」

大地は感心したように言った。

「はい、次は？」

「三つ目が、『家門いへかど高く富とみ榮さかえて』ですね。家門…か？」

「家門」は、「一家一門」ということ」

「なるほど。ということは、一家一門が裕福に榮えるように、ということですか？」

「そう」

「なんだか、二つ目と三つ目は、とても現実的ですね」

「まあ、そうね。この世は現実の世界だから、健康と財産は必要だからねえ。でも、必要以上の富をください、ってぜいたくなお願いをしているわけじゃなくて、分相応ということが大切だけどね」

「『感謝みやび祈願のことば詞』を奏あげるときに、ここだけ力が入りそう」

大地が、冗談っぽく言った。

「いや、実際そういうふうにならうに奏げてる祝詞を、私も聞いたことがあるのよ」

音江は笑いながら言った。

「え、ホントですか！」

大地は驚いた口調で言った。

「名・位・寿・富っていうけど、これはある程度必要なもののよ。でもね、人はこれだけを得ようとするために生きていたらいけないの。世のため人のため、そして神さまのために働いていたら、自然と授かるのが本当の名位寿富なのよ。」

かむながら真の道をさとりなば

名位寿富はひとりそなはる

この聖師さまのお歌の通りなのね」

「主客転倒してはいけないということですね」

「じゃあ、次は？」

「『美し天地の花となり光となり』、ん、文字からいうと、美しい天地の中の、花や光のようになりたい、ってことでしょうか？」

「そうね、そういうふうにも受け取れるけど、私は、『美し』は『天地の花』、『天地の光』にかかるとは思わないかと思うのよ。『天地の花・光』というのが、この世とあの世に生き通しする私たち人間の魂のことだと理解しているのよ。その魂がより美しく清らかにありたいという願いじゃないかな。だからこの部分をもう少し深く解釈すると、世のため人のために役に立つ人間にならせてください、っていう意味に受け取れるんじ

やないかと思うのね」

「なるほど、深いなあ。」

「それで、そのことが五つ目のお願いつながるのじゃないかな？」

「えー、最後は、『大神の御子たる身の本能を発き揚しめたまへ』なので、神の子としての自分の本能を発揮させてください、ということでしょうか？」

大地は少し不安げに言った。

「大地君、身の本能って、なんだろうね？」

音江の質問に大地は、しばらく考えてから答えた。

「たぶん、人それぞれの個性とか特性じゃないかと思いますが…」

「そうね、その人のために神さまが与えられたものということね」

「一人一人がオンリーワンですからね」

「そういうこと。日本人は、『謙譲の美德』といって、自分の才能や長所を遠慮して隠してしまうことがあるでしょ」

「そうなりがちかも」

「過剰に謙虚になりすぎると、せっかく神さまから与えられている特性を発揮できず、

宝の持ち腐れになってしまいかねないでしょ。それは神さまの目から見たら罪になるのよ」

「あ、確か『包み隠す』ということで、罪でしたね」

「おや、よく知ってるね」

「いやだなあ、おぼあちゃん。さっき教えてもらったじゃないですか」

「あら、そうだったねえ」

音江は恥ずかしさを隠すように、湯呑みを取り上げ、お茶をすすった。大地もそれに合わせるように、お茶を飲んだ。音江は湯呑みをテーブルに置き、一つ咳払いをし、それから話しを続けた。

「この世の中は本来、人それぞれがお互いの特性を認め合い、発揮し合うことによって、より良い世の中を築くことができると思うの」

「足の引つ張り合いはよくないですよね」

「神さまはその人にしかない使命、役割を与えておられるんだから、それを自覚し、精いっぱい発揮することが、『大神の御子たる身の本能を^{ひら}発^{あけ}き揚^あげしめたまへ』ということになるのよね」

「ぼくにも、それがあつのかなあ？」

「もちろんよ大地君、いい個性を持っていると思うよ。しっかりとがんばってね」

「はい、ありがとうございます」

二人は自然と笑顔になっていた。

「さあ、次いきましようか」

「はい。え〜つと、次は…」

と言いながら大地は「おほもとのり」と、目をやった。

「『仰あふぎ願ねがはくは大御神おほみかみの大御心おほみこころに叶かなひまつりて、身みにも心こころにも罪惡つみ汚穢けがれあやまち過失あらしめあらしめず、天授もとつ之至靈みたまを守まもりたまへ』ですね。むしろかしいなあ。この『天授もとつ之至靈みたま』というの、魂のことですか？」

「これは、『感謝祈願詞』の最初のところで説明した直靈魂なむねのみたまのことよ」

「あ、一靈四魂の一靈のことですね」

「天から授かった究極の靈魂、ということね」

「なるほど」

「できることなら大神さまのご期待にそえるように、罪惡や過ちに犯されることなく、天から授かった直靈魂を生涯お守りください、ということが全体の意味になるの。こ

「それは、私たちの人生の目的でもあるのよ」

「え、つ、人生の目的ですかあ？」

「天から授かった究極の靈魂を汚すことなく再び天国に帰ることは、何より大切なこと。その上で神さまのご期待にそえるような生涯を送ることが本来の目的であるわけね。この二つのことは、どちらか一方ではだめで、二つあわせて人生の目的になるのよ」

「何だか“究極の人生の目的”、って感じですね」

「そういうこと。でも、まだ大地君にはピンときてないかな？」

「そ、そうですね。またゆっくり考えます。ところで、魂を汚すものには、どんなものがあるんですか？ それを知っていれば、も天授之至み靈まを守りやすくなりますよね」

「大地君は、ポイントに気づくのが早いね」

「そうですね？」

照れている大地に音江は言った。

「それはね……」

恐るべきは執着心

「それは、何ですか？」

大地は、聞き返した。

「聖師さまのお示しに

天地あめつちの神かみの宮居みやみと生まれたる

人の身魂みたまぞ清くもたまし

というお歌があるんだけどね、このお歌からすると、人の身魂というのは、天地の神さまのお宮となるべくして生まれたものであって、それをいつまでも清く持ち続けましょう、ということなの」

「あの、お歌はいいんですが、一回聞いたくらいでは、僕、覚えられないんですけど……」
「あつ、それはそうね。じゃあ」

そう言って音江は、台所の恵子に声をかけ、鉛筆と新聞広告の裏紙を利用したメモ用紙を持ってきてもらった。

「はい、どうぞ」

恵子が音江に手渡した。

「ありがとう」

音江は、メモ用紙にさつき詠んだ道歌を書き記し、それを大地に見せた。

「こういうお歌なのよ」

大地は、メモ用紙に目をやった。

「やっぱり聞くだけじゃなくて、目で見た方がピンときますね」

「最後の『もたまし』、っていうのは、持つべきでしょう、という意味だから、身魂を汚さないように清くもつべきでしょう、ということだと思ふのね」

「なるほど。清く保てなかった場合に、身魂が何によって汚されるのか、ということになるんですね」

「そうね」

「で、それは何ですか？」

大地はたたみかけるように聞いた。

「大地君は何だと思ふ？」

「うわ、おじいちゃんといっしょの逆質問だ」

「意地悪だったかね？」

「あ、いや、そんなことはないですが……。『天授之至靈』の魂を汚すものですから、やつぱり『悪いこと』かなあ？」

「『悪いこと』、というと？」

「たぶん、おじいちゃんが言つてた罪とか穢れとかじゃないかと思うんですが……」

「やつぱり大地君は察しがいいねえ」

と言いながら、大地に見せていたメモ用紙をとり、さっきの歌の横に、もう一首道歌を書いた。

人々の心に澄める月かげを

かくすは欲と罪の雲なり

「これがその答えね」

大地は、メモを見ながら、その歌を声に出して読んだ。

「これって、どういう意味ですか？」

大地は首をかしげながら言った。

「月かげというのは、漢字ではこうかくけど」

と言いながら、「月影」と書いた。

「月影は、月の光、月の形や姿のことをいうのよ」

「月の影じゃなくて、月の光や形ですか」

「そう。『澄める』は、清らかに澄んでいるということ、住んでいる、心にある、という両方の意味があると思うんだけど、要は心にある神さまの光ということね。これを隠してしまう。『隠す』は、葬るとか偽るといふ意味もあるのよ。で、隠してしまうその『雲』は何なのかというと、人の欲と罪だ、とおっしゃってるのよ」

「あー、なるほど、このお歌には、そんな深い意味があるんですね」

と言ってから、大地はしばらく考えてさらに質問した。

「それじゃあ、人間がその欲や罪を作ってしまう原因は、何なんですか？」

「そうね。聖師さまは人が欲と罪に迷う最大の原因について、それは『執着心』だと言っておられるのよ」

「執着心ですか」

「そう、靈界物語の中でもいたるところで執着心の恐ろしさを戒めておられるんだけど、これが一番の原因のようね」

「執着心かあー。でも、執着心のない人なんているのかなあ？」

大地は首をひねりながら言った。

「この現実の世界、物質の世界で生きている間は、みんな何らかの執着心はあるものよ。まあ、私みたいな歳になつてくると、だんだん薄くなつてくるけど、大地君のような若者なら、たくさんあるかもね」

「は、はい」

「おや、正直ね」

「あの、その執着心をなくすにはどうしたらいいんでしょうか？」

「そうね、かんながら惟神かなあ」

音江は即答した。

「惟神？」

「つまり、神さまに、神さまのみ教えに、おまかせする、ということね」

「神さまにおまかせする、ですか？ 僕にはまだピンとこないかもしれません」

「そりゃあそうよ、今から“わかりました”って言われたら、ビックリしちゃうわよ。

ただ、そのことを知っていれば、何かのときに役にたつかもね」

「はい、覚えておきます」

「はい、いい心がけです」

「で、具体的にはどうしたらいいんですか？」

大地は、笑顔で質問を続けた。

「そうね、この『おほもとのり』を奏上することがいちばんね。もちろん意味も理解しながらね」

「明従めいじゆう、ですね」

「そう、そういうこと」

「あつ、だから今、感謝祈願詞みやびのことばの意味を教えてもらっているんですものね」

「そうだったね」

二人は笑いながら言った。

「それじゃあ、続きね」

と言いながら、音江は『おほもとのり』を読んで説明を続けた。

『すべての事業をなすにも、大御神の恩頼を幸はへたまひて』

「恩頼というのは、恩恵とかご加護ということだから、どんな事をするにも、まず神さまのご守護をいただいて、という意味ね」

「はっ」

『善事正行には荒魂の勇みを振り起し、ますます向進発展完成の域に立到らしめたまへ。朝な夕な神祇を敬ひ、誠の道に違ふことなく、天地の御魂たる義理責任を完うし、あまねく世の人と親しみ交こり、人慾のために争ふことを恥らひ』

音江は『おほもとのりと』をここまで読み、説明を始めた。

「この部分からは、さつき話した一霊四魂の働きのことをより詳しく説明されているところなのよ」

「そうなんですか」

大地は、音江が読んだところに目を落とした。

「四魂にはそれぞれ相反する二つの働きがあって、しかもそれを制御する力が備わっ

ているのよ。最初の荒魂だけど、善い方に働いたら「勇む」になって、それが行き過ぎって悪い方に働いたら「争い」になるの。そしてそれを制御するブレーキの役目が「恥る」という感情なのよ」

「へえ〜」

「ここの最初のところは、善いと思うことは、荒魂の勇気を振り起こして、より善い方向へ向かって発展・完成させてください。そのためにも、朝夕、神さまを拝み、道からはずれないようにして、神さまからいただいた身魂の本来の務めを全うさせてください。世の中の人々と親しく交わって、恥の心をもって自分の慾のために争うことがないようにしてください、ということが大まかな意味になると思うのよ」

「なるほど、この一節の中に、荒魂、勇、争、恥、って全部書いてありますね」
「ね、すごいでしょ。で、次が和魂よ」

『和魂の親みによりて人々を悪にくまず、改言改過あやまちをくひ、悪言暴語ののしることなく、善言美詞みやびの神嘉言かむよごとをもつて神人かみかみを和なごめ、天地あめつちに代かわるの勲功いさをしを堅磐かきはに常磐ときはに建て』

「和魂本来の働きは「親み」で、それが行き過ぎたり方向を間違うと「悪」になって

しまうの。その時のブレーキ役が後悔の悔という字で、「悔いる」という働きのね」と言う音江の言葉を聞きながら、大地は『おほもとのりと』を少し引き寄せて、首をかしげて言った。

「あの、その悪と悔やむというのはどこにありますか？」

「悪は、悪言暴語の最初にあるでしょ」

「あ、ホントだ」

「悔やむは、単語そのものはないけど、同じ意味のことが書いてあってね。それが…」

と言いながら、『改言改過』の^{あやまちをくむ}ところを指さし、

「ふりがなで、くむ」と書いてあるでしょ」

「あ、なるほど」

「悔ゆる」というのは、悔い改めるということで、くよくよ後悔するだけじゃなくて、より積極的に改めていくことなのね」

「悔い改めるかあー」

「人は、どうしても自分の物差しで人を判断してしまうものなのね。それで計れないときは、自分を正当化しようと、知らず知らずに相手を悪く思い、それが悪言暴語になってしまいがちなのよね」

「そう…ですね」

「そんなときに、悔い改めて、悪い言葉を使わず、できるだけ善い言葉を使うように心がけないといけないの。そうして神さまも人も和ませ、神さまに代わって、正しく永遠に勲功をたてさせてください、つてことかねえ」

「ん、なんか深いなあ」

「そうよね。で、次が幸魂ね」

幸魂さいちみたまの愛めぐみ深く

「幸魂は…っと、あ、ここですね」

大地はそう言つて、『おほもとのり』の続きを読み始めた。

『幸魂の愛深く、天地あめつちの間に生いきとし生いける万物ものを損そこひ破やぶることなく、生成かむな化育ながらの大道おほみちを畏かしこみ』

「幸魂についても、荒魂あらみたまや和魂にぎみたまと同じように本来の働きと、逆に働いた場合、それからその時のブレーキ役が書かれているんですか？」

「そう、ちゃんと書かれているのよ。幸魂の本来の働きは、**愛**。それが行き過ぎた方向を間違えると**逆らう**になってしまつて、その時にブレーキ役をするのが**畏む**”という働きのよ”

音江の説明を聞いた大地は、『のりと』を見ながら、少し首を横に傾けて考える様子をしながら訊ねた。

「あの、ここには**愛**と**畏む**の字はあるんですが、**逆らう**という漢字は書

いてないようなんですけど…?」

「それはね、「損ひ破る」 という言葉で置き換えてあるみたいだねえ。この世界に生存する生物を 「損ひ破る」 ということは、みだりに傷つけたり殺したりして、生命を保とうとする万物の本質に 「逆らう」 ことだからね。」

「あ…、そうなんですな」

「「靈魂の本来の働きである愛は、『のりと』の中では、『めぐみ』と読ませてあるし、ほかに『いつくしみ』とも読むでしょ。大地君は、『愛』という言葉を聞いて何を思い出すかなあ?」

「そうですね…。男女の恋愛とか、親子の愛とかですかね」

「そうですね、やっぱり人が人を 「愛する」 ということを一番に考えるよね。でもね、愛するということは、人と人との関係がうまくいっているときはいいんだけど、いったん仲が悪くなったり、関係にヒビが入ったりすると、「かわいさ余って憎さ百倍」 という諺があるくらい、お互いに憎み合うようになったりすることがあるものなのよね」

「そう言えば、サスペンスドラマとかでよくあるパターンですね」

「そうですね、お互いの心が離れて、そのうちに顔を見るのも嫌になったり、相手のすることなすことに対して、ことごとく逆らったりするようになるものよね。そうなる」と

なかなか元のような関係に戻すのは難しくなるの」

「でしょうね」

「そんな関係を、修復するためには、できるだけ早い時期に、『畏れる』という気持ちに帰ることが必要になってくるのね」

「『畏れる』というのは、こわい、おそろしい、と思うことですか？」

「いいえ、言葉の意味からはそうとも受け取れるんだけど、実は『畏れ慎む』ということで、『おそれ多くつつしむ』ということなの。大地君は、『畏敬』という言葉はわかるかな？」

「はい、『畏敬の念』とか言いますよね」

「そう、畏れるということは、相手を敬うという気持ちになる、ということでもあるのね」

「そうか、人間関係では、相手を敬うという気持ちがなくなると、愛するということができなくなる、ということですね」

「そういうこと。でもね、大地君」

音江は少し身を乗り出して言った。

「何ですか？」

「この『のりと』の幸魂の部分は、もっともっと深い意味があるのよ。よく見て！」
そう言いながら、音江は大地が読んだ部分を指さした。

「ここでの愛は、『天地の間に生とし生ける万物』に対する愛を示してあるのよ。つまりこの世に生命を受けている万物、すべてのもの、言葉を代えると『人群万類』というものに対する大きな愛のことなのね」

そう言いながら、音江はメモ用紙に『人群万類』と書いた。

「なるほど、人間を始め、生きとし生ける物すべてということですね」

「そう、だからものすごく大きな愛ということになるよね」

「そんな愛の心を持つことは、僕には無理ですよ。だって、蚊一匹だって殺せないということですよ。いや、無理、無理」

大地は顔の前で手を振りながらそう言った。

「そうよね。そういう意味では、人間は知らず知らずに、愛に逆らう行為をしているものなのよね。だから本当の大きな愛を持てるのは、万物を造られた神さまだけということがわかるのよ。そうした神さまの愛のことを聖師さまは“平等愛”と示されているのよ。すべての生きとし生ける物を平等に愛されるということね」

「平等愛」ですか。これは簡単な言葉のようですが、何だかものすごく重い意味があるように感じますが…」

「そうですね。信仰をしている人が、私は神さまを愛しています」、なんて言うことがあれるけど、私はそれはちよつと違うなあ、って思うのよ。気持ちはわかるけど、愛という言葉の使い方を間違っているんじゃないかなと思うのね」

「と、い、うと?」

「愛するというのは、親が子を愛するというように、上から下へ向かったもので、神さまが人を愛される」、っていうのが本来なのよ」

音江は言葉を囁みしめるように言った。

「じゃあ、神さまを信仰している人はどう言ったらいいんですか?」

大地が訊いた。

「そうですね。神さまを「恋い慕う」、と言った方がいいんじゃないかなあ。神さまが人を愛し、人が神さまを恋い慕う。だから、「信仰は恋愛の心」という聖師さまのお示しがあるのよね」

「あつ、なるほど」

大地は納得したようにうなずきながら言った。

「大地君も、早く恋い慕う人ができたらいいなえ。あ…、それとも、もういるのかな？」

音江はニコニコしながら訊ねた。

「い、いえ、いませんよ。さあ、おばあちゃん、次いきましよう！」

大地はあわてて『おほもとのりと』を手にとり、続きを読み始めた。

『奇魂くしみたまの智ひかりによりて、異端まがのをしへ邪説じやくの真理ことわりに狂くるへることを覚悟さぶとるべく』

「次は、奇魂ですね」

「そうですね。奇魂の本来の働きは、**智**。ここでは**ひかり**と読ませているね。それが行き過ぎたり方向を間違えると**狂**になってしまって、その時にプレーキ役をするのが**覚**。という働きなのよ」

「智の働いてどんなことですか？」

大地が訊いた。

「今の世の中、殺人や強盗事件、誘拐や詐欺など、いろんな悪事がはびこっているでしょ。さも善いことのように見せかけて、悪いことを働く人間もたくさんいるよね。そうした罾や誘いにうっかり乗せられないようにするためには、奇魂の智が必要な

よ。智をしつかり働かせて、真理に反して狂っている異端邪説をしつかり覚りなさい、
つていうことね」

「最近流行っているオレオレ詐欺なんかもそうですよね」

「そうよ。詐欺にひっかからないようにするには、奇魂の智をしつかり磨くことが大切なのね。以前、家に消化器の斡旋に来た人がいたの。『消防署の方から来ました』、
つて言つてね」

「消防署員になりすましてたつてことですか？」

「でもね、消防署から来ました、とは言つてないのよ。消防署の方から来ました、つてね」

「あ、なるほど、消防署がある方角から来た、ということですね」

「年寄りの中には、消防署だったら大丈夫だろうと、高いお金を払つて買つてしまつた人もあつたのよ」

「お婆あちゃんは大丈夫だったんですか？」

「私も年寄りだけど、そこはそれ、奇魂の智慧を發揮して、きつぱり断つたわよ」
と得意そうに笑いながら言つた。

「よかつたですね」

大地も笑いながら言つて、質問を続けた。

「その智慧というのは、正しい知識のことなんですネ」

「ちよつと違ふかな！」

と言いながら、音江はメモ用紙に『智慧』と『知恵』と書いて、最初の方を指さして大地に見せた。

「なるほど、こんな字なんですネ」

「辞書だどどちらも同じような意味で載っているけど、こちらの智慧は、宗教的えいち叡智えいちという意味合いが近くて、より本来的な常識でもあると思うの」

「常識…？ 常識というのは、普通一般的なあの常識ですか？」

「普通の常識というのは、人によつて基準が違っている場合があるよね。聖師さまの道歌のなかで、常識という言葉が出てるのがこのお歌なの」

と、言葉が終わらないうちに、音江はまたメモ用紙を手元に寄せて道歌を一首書いた。

常識は神の誠の道まなび

得たる智慧より何ものもなし

「時代や場所に左右されない本当の常識というのは、神さまの教えを学んで得る智慧

以外にはないということ。後天的な知識や知恵じゃなくて、智慧は、人が元々神さまからいただいたているものなの。そこに神さまの光をいただいて本来の力を発揮できるというわけ。智慧の智は、日ひを知る、日ひというのは靈のことでもあるし、神さまのことでもあるのよ」

「何となくわかったような、わからないような…？。でも、これから何かあった時は、この問題は奇魂を働かせて覚るとどういふことかなあ？」と、考えるようになります」
大地は姿勢を正して言った。

「そうね。それが第一歩ね」

音江はうれしそうに大地の顔を見ていた。

「さあ、次がいよいよ直日なおひの御霊みたまよ」

鎮魂帰神の神術によりて

「わかりました。直日の御霊ですネ」

そうやって、大地は『おほもとのりと』に目を落とし、続きの一節を読んだ。

『直日の御霊によりて正邪理非曲直を省み…』

そこまで読んで、音江が言葉をはさんだ。

「さつき説明した、四つの魂が正しく働くためには、どうしてもこの直日の御霊の働きが必要なのよ」

「じゃあ、四魂の総元締め”って感じですか？」

「まあ、そうね」

音江は笑いながら話を続けた。

「この”省みる”心は、とっても大切なのよ」

「反省心ですネ」

「そう、”省みる”心は、四魂それぞれの中にもあるんだけど、それが弱くなると、荒

魂みたまは争魂そうこんに、和魂にぎみたまは悪魂あくこんに、幸魂さいちみたまは逆魂ぎやくこんに、そして奇魂くしみたまは狂魂きやうこんになってしまつて、本来の正しい働きができなくなるのよ」

「ブレーキが効かなくて、四魂がそれぞれ本来の働きとは逆に働いてしまうということですね」

「今の世の中、世界のあちこちでたいへんな戦争や事件・事故が起こつていてるでしょ。その原因を突き詰めていくと、私は最終的には“人の心”の問題に行き着くと思つてゐるの」

「人の心ですか？」

「一言でいうと、神さまが警告されている“われよし”、“つよいものがち”の心ね。で、それをあらためるのに一番必要なのが、“省みる”という、いわば究極の力なの」

「なるほど」

「“ごこのよしあし”を省みるというので、正邪理非曲直と書いてあるでしょ」

「はー」

「私たち人類が、一日も早く、神さまからいただいているそれぞれの直日の御霊本来のささやきに目覚めて、何が正しくて何が邪よこしまなのか、理あやになつてゐるのか非あやざるのか、真つ直ぐなことなのか曲まがつたことなのか、それを省み判断して、人としての本分を

尽くすことが大切なことなのよ」

「何だか話が大きくなりましたね」

「あら、ごめんなさい。そうね、世界も大切だけど、まずは自分自身が、日々の生活の中や人との関わりで、直日の御霊の働きを十分に発揮することが先決よね」

「つまりは、折に触れて反省しなさい、ってことですか？」

「反省しなさい、っていうと何だかクヨクヨしたような感じで消極的に受け取る人もいるかもしれないけど、本来は積極的に省みることが肝心で、実は省みることとは、とても修練が必要なことなのよ」

「んー、ということは、よくよく考えて努力し、四魂の正しい力を働かせながら省みるということなんですかねえ」

「そうよ」

大地は思いついたように言葉を継いだ。

「じゃあ、愛あいと親したしみを持つて、智ちてき的に勇いさんで省かえりみる、ということですね」

「あら、五情の働きを全部もりこんじゃったわね、大地君」

ちよつと得意そうな表情になった大地を、音江は微笑ましく見つめて話を続けた。

「そのあとに、『もつて真誠まことの信仰あななひを励はげみ』ってあるでしょ」

大地も『のりと』に目をやった。

「真誠の信仰”ってどんなものですか？」

大地が訊きいた。

「これはなかなか難しい問題ね。言葉を代えると、何のために信仰するのか”ということかと思うけどね」

「では、おばあちゃんは何のために信仰しておられるんですか？」

大地はあらためて訊きいた。

「そうね。世間一般だと、まず健康やお金もつ儲もつけ、悩み事解決りやくというようなご利益りやくのため、というのが通説かと思うけど…」

「ご利益も大切ですよね」

「もちろん、ご利益を否定するものではないわ。でも、大本のみ教えでは、ご利益そのものが信仰の第一目的ではないことは確かね」

「そうなんですか？」

「あら？ 大地君は、綾部のおじいちゃんを見ていて、そう思わない？」

「あ、まあ、確かにそうですね」

「でしょ」

「ご利益は、まことの信仰の結果としていただけるものというのが正解かな。それに大本では、あまりご利益という言葉は使わないのよ」

「そうなんですか？　じゃあ、何って言うんですか？」

「それはね…」

と言いながら音江は、メモ用紙を手に取り、〃神徳〃と書いた。

「これに御をつけて御神徳ごしんとくと言ったり、〃おかげ〃と読んだりするのよ」

「あつ、前に聞きましたね。人間の場合、人徳というように、神さまの徳ということですね」

「そうですね。〃おかげ〃という言葉は一般的にも、何か良いことがあったりすると、〃おかげさまで〃って言うでしょ」

「はい、言いますね」

「たとえば病気になって、雨宮先生という良いお医者さんにかかって思ったより早く全快したら、『雨宮先生のおかげで元気になりました』って感謝するでしょ」

「はい」

「それと同じように、日々生きていることは、神さまの大きな“おかげ”なの。もともと、“おかげさま”は、“陰”の頭に“御”、後ろに“様”をつけて、“陰”をていねいに言った言葉よね。古くから“陰”は神仏など偉大なものの“陰”ということで、そのお守りを受ける意味として使われていたのよ」

「なるほど、“おかげ”は、“神さまのお守り”ということなんですね」

「そうなの。こうして生かさせていただいていることそれ自体が、実は神さまの大きな陰の下にいるからなのよね」

音江はしみじみと語りながら、ゆっくりとうなづく大地を見た。そして、気づいたように

「あら、ごめんなさい」

と大地にお茶をすすめた。

大地は湯呑みを手にし、お茶をすすった。

「ぬるくなつたんじゃない」

「大丈夫です」

「ほら、一茶まんじゅうもつまんでよ」

「はい、ありがとうございます」

音江もお茶を飲んだ。

「次の『のりと』もむずかしいですね」

そう言って大地は続きを読んだ。

『言霊ことたまの助けによりて大神おほかみの御心みこころを直覚さとり、鎮魂みたましづめ帰神みわざの神術みわざによりて、村肝むらきもの心を練ねり鍛きたへしめたまひて』

「言霊は、最初に話したでしょ」

「はい、うかがいました」

「私たちは、何かをしようと思うと、口には出さなくても、まず心の中でそのことを思い描くでしょ。その時、すでに心の中で言葉になつていない？」

「そういえば、そうかもしれないね」

「それを口から言葉として発すると、はじめて思いがよりはっきりしてくると思わな
い？」

「そうですね」

「そう考えると、私たち人間は、日頃からいかに言霊の助けにあずかっているかわかるんじゃないかしらね。それに言霊には力があるから、できるだけ良い思いを持って言霊を使えば、神さまのみ心により近づくことができると思うのね。それがこの部分の意味になるのよ」

「なるほど。で、その続きの『鎮魂帰神の神術』って、どんな術じゆつなんですか？」

「術じゆつというと、何か特別な技わざのようだけど、そうじゃないのよ」

「そうなんですか？」

「大本では、こうして…」

と言いながら、音江は鎮魂ちんこんの手を組みながら話を続けた。

「ちよつと見慣れないかもしれないけど、こんなふうふうに手を組んで、正座せいざ瞑目めいもくする作法で、『鎮魂』というのがあるの」

「え、どうするんですか？」

「あ、こうして手の甲と甲をあわせて…」

と、音江は大地の手をとりながら、鎮魂の手の組み方、腕の構え方や瞑目の仕方を通り教えた。大地はソファに座ったままで、音江の言う通りに、鎮魂の姿勢をまねた。

「まあ、こういう鎮魂というのはあるんだけど、ここでいう『鎮魂帰神の神術』というのは、一作法ではなくて、広い意味で、“神さまの心を自分の心とする”というように理解した方がいいと思うの。要は、てんしんらんまん天真爛漫な赤ん坊のような心になることなのね」「赤ちゃんのような心ですか？」

音江は、半信半疑な表情をする大地を見て、目の前の湯呑みを手にとって例え話を始めた。

「大地君、この湯呑みは、本来何のためにあるのかな？」

「一番の目的は、お茶を飲むためですね」

「そうね。時には水を飲んだり、お酒をついだりすることもあるかもしれないけど、本来お茶を飲むためよね。ジュースや牛乳を飲むためのものじゃないよね」

「はい」

「この湯呑みは、お茶を満たすことで本来の働きができるわけ。もし、お茶の代わりに牛乳を入れたり、お茶が入っているのに、ジュースをつぎ足したらたいへんよね」

「そうですね」

「つまり、おいしいお茶をいただくという湯呑み本来の働きを十分に發揮することが、

この湯呑みの使命なの」

「はい」

「湯呑みに入れるべきまともなお茶が必要量入っていればいいんだけど、それが半分しか入ってなくて、あとの半分が泥水や不純な物が入っているとすると、清涼なお茶の味も、香りもなくなるように、私のたちの体が湯呑みで、お茶が魂だとすると、悪い霊が入り込んだ人体は、人としての味も香りも徳もないものになってしまうのよ」

「なるほど、赤ん坊のような心になるというのは、生まれたての純粋な魂に帰るということかあ。だから、『鎮魂帰神の神術』がそういう意味なわけですね」

「村肝というのは、心にかかる枕言葉だから、赤ん坊のような純粋な心になるよう、私の心を練って鍛えさせてください、っていう祈願ということね」

「深いなあ」

大地は感心するようにうなずいた。

敬けんな姿で深い祈りを

話を熱心に聴く大地を、音江は自分の孫を見るような目で見ていた。そこへ恵子が入ってきた。

「大地君は、ホントえらいねえー」

「えっ、何がですか？」

「だって、おばあちゃんの話をしつかり聴いているんだものね」

「あー、でもおもしろいですよ」

「だから、感心してるのよ」

恵子が手にしているお盆の上には、皿に盛った“おやき”が乗っていて、湯気が立っている。

「今、蒸したからどうぞ」

そう言いながら恵子がテーブルにおやきを置いた。

「もうおかまいなく」

大地が遠慮気味に言った。

「まあ、食べなさい、若いんだから」

音江が勧めた。

「はい、ありがとうございます」

大地はおやきを一つつまんで、半分は割った。

「粒あんのおやきですね。いただきます」

「へえ、どうぞ」

「ん〜っ、おいしい！」

「そうかい、そりゃあ良かった。じゃあ私も…」

そう言いながら音江も一つつまんだ。

「こりゃあ、カボチャだね」

「カボチャもあるんですね」

「最近のおやきは、種類が増えたのよ。昔、家で作る時は、粒あんのほかに、野沢菜と切り干しダイコン、丸ナスだったけどね」

恵子が説明した。近くにおやきの専門店もできたらしい。ひとしきりおやきの話をしたあと、音江が言った。

「じゃあ、続きを話そうかねえ」

「はい。え〜と、ここからですね」

お茶を飲んでいた大地は、湯呑みを置くと、『おほもとのりと』を手にして、読み始めた。

『身に触るる八十の汚穢も、心に思ふ千々の迷も、祓ひに祓ひ退ひに退ひ、須弥山の神山の静けきがごとく、和知川の流の清きがごとく動くことなく変ることなく、息長く偉大くあらしめたまひ』

「さつき、一霊四魂と五情の働きで、私たちの心を練り鍛えさせてください、つてお願いしたところまでいったでしょ」

「はい、そうでした」

「でも、そうお願いしたけども、私たちは現実の世界に身を置いているわけだから、知らず知らずにいろいろな穢れや迷いがわき起こってくるのよね」

「人間ですからね」

「それを祓って、静かで神々しい弥仙山のように、それから和知川の清流のように、清らかで動くことなく、変わることもなく、いつまでも続くようにお願いします、というのがこの部分の大まかな意味なのよ」

「あのおく、和知川は節分の時に人型を流した綾部を流れる川だと思うんですが、その前の須弥仙の神山、今、弥仙山といわれましたけど、それはどこの山ですか？」

「この山はね、綾部の梅松苑から見えている山なんだけど、大本にとつてゆかりの深い霊山で、弥仙山という山なの。地元では丹波富士とも呼ばれていて、きれいな形をした山なのよ。『おほもとのり』では、弥仙山と和知川の様子で、清らかさをたえてあるのよ」

「そういうことですか、わかりました」

「それじゃあ、その続きを読んでみて」

『世の長人世の遠人と健全しく、親子、夫婦、同胞、朋友相睦びつつ』

「この最初のところの、『世の長人』と『世の遠人』の二つの言葉だけど、どちらも“長寿の人”という意味なのよ。『健全しく』は、“健康で”ということだから、あわせて健康で長生きをして、ということね。そのあとは、だいたいわかるでしょ」

「親子、夫婦、仲間や友達同士仲良く、ということですね」

「そうね、当たり前のことをあえて書いてあるということとは、今の世の中、そうした

ことも危うくなっているのかねえ」

「そうなのかもしれませんね」

「さあ、その続きね」

『天あめの下した公共こうきのため、美うらしき人の鏡かがみとして、太いじき功績いさをを顕あらはし、天すめ地の神かみ子みこと生うまれ出いでたる其その本もと分わけを尽つくさしめたまへ』

「漢字を見たら、だいたいの意味はわかるところと思うけど、ここは『感謝みやび祈願のこ詞ば』の結論のようなところじゃないかと思うのよ」

「なるほど、そうなんです」

「世のため人のために、人の模範もはんとなって、人としての立派な功績をおさめて、神さまの子としてこの世に生を受けた本分、目的を果たさせてください、ということね。つまり、人生の意義や目的を達成させてください、ということでも大切なお願ねがいね」

「人生の意義と目的っていうと？」

「神さまの理想とされる世界、大本では“みろくの世”と言っているけど、地上天国。これを建設することが、人生の意義であるし大きな目的なのよ」

「そうなんですか？」

大地は少し首をかしげた。

「なんだかピンときてないみたいだけど、大地君もおいおいわかってくるわよ」

「はい、勉強します」

大地は、少し笑いながら言った。

「あつ、でも、これが結論なら、その後の部分はどういうことですか」

「それはね、今まで説明してきたことを誰にお願いするかということ。続ぎに、『すべての感謝と祈願は』とあるけど、それが、その前の部分をさすわけね」

「なるほど、これまでの感謝と祈願の内容全部をお願いする対象が、この後登場するわけですね」

「そうよ、さて、それは誰かな？」

音江の質問を受けて、大地はその後の『のりと』を何度か読み返した。

「あつ、これかな？」

「どれどれ」

「綾部でおじいちゃんに聞いた神さまの名前があったんで」

「どこと？」

「くにたせにたちのおほかみ国常立大神、とよくもぬのおほかみ豊雲野大神、じゃないですか」

大地は、『のりと』のその部分を指さして言った。

「そうそう」

「この大地を作られた、こくそ国祖の神さまとその妻神つまがみですよね」

「まあ、大地君、たいしたものね」

「いやあ、この間おじいちゃんに聞いたばかりですから」

大地は照れながら頭をかいた。

「『国常立大神、豊雲野大神』の直前が、『おほみおや国の大御祖』ってあるけど、これが大地君が言った『国祖』と同じことね。そして、その前がそれにかかる修飾語になるわけね。

ちよっと読んでみて。

「はー」

『ちくち千座のおきど置戸を負ひて、たまがき玉垣のうちつみくに内津御国のほつま秀津間のわたなか国の海中の、おもと沓島しじま神島の無人島に
かむら神退ひに退はれ、あまつみ天津罪、くにつみ国津罪、こことくのつみ罪科を祓ひたまひし、うつしよ現世幽界のまもりがみ守神

なる…」

「まず、『千座の置戸を負ひて』というのは、神々や人々が積み重ねてきた罪を代わって背負うこと。『神退ひに退はれ』は追い出されること、退隠たいいんさせられることね」

音江は、大地が手にした『のりと』の文字を指さしながら説明を続けた。

「つまり、すべての罪を引き受けられて、杳島めしまと神島かみしまに追い退われたこと。そして、この世とあの世すべての罪穢れをお祓おまいして、ご守護ごしゆごくださる国祖とその妻神ということね。この部分は、初めて『のりと』を読む人だったら、たぶんわからない内容かもしれないけど、大地君は松太郎さんに、国祖の神さまのご退隠のことを聞いているっていうから、だいたいわかるよね」

「まあ、何となくですけど…」

大地はうなずきながら言った。

「その杳島・神島が無人島だというのはわかりますが、それはどこにある島ですか？」

「『玉垣の内津御国の秀津間の国の海中の…』というのは日本の海上、ということね」

「日本のどこですか？」

「杳島が、綾部から見て良うしろ、東北の方角にある京都府舞鶴市沖で、若狭湾わかさわんの海上にあ

る孤島よ。それから、神島は、綾部の坤あやの、西南の方角で、兵庫県の高砂市沖にある島なのよ」

「良と坤ということは、杳島に国常立大神が退隠されて、神島に豊雲野大神が退隠されたということですね」

「そう、察しいがいね、大地君」

「その後の『のりと』ですが…」

そう言つて大地が続きを読んだ。

『また伊都いづの御魂みたま、美都みづの御魂みたまに幸まかはへたまひて聞きしめし、相あうづなひたまひ』

「『国常立大神、豊雲野大神』の後に、また別の名前が出てきますけど、これは何ですか？」

「『伊都の御魂、美都の御魂』というのは、国常立大神さまと豊雲野大神さまの二柱の神さまのことだけど、この世に現れられた時、国常立大神は、厳格な縦役の伊都の御魂の神さま、つまり開祖さまを通して出現されたの。そして、豊雲野大神は、救いの美都の御魂の神さま、つまり聖師さまのお姿でお生まれになって、私たちに尊い教えを伝えてくださったわけ。だからこのみ名によって、ご守護とみ救いにあずかれます

ように、そして幸多くあることをどうぞお聞きとどけください、ということなのよ。そして…」

音江が『のりと』の最後の部分を読んだ。

『夜の守り日の守りに守り幸はへたまへと、鹿兒自物膝折伏せ宇自物頸根突抜きて、
恐み恐みも祈願奉らくと白す』

「最後は、大神さまに対し、精いっぱい敬けんな姿勢と心で深い祈りをささげます、
という意味なんだけど、その姿勢が二つのだとえで書かれているのよ」

「二つですか」

『鹿兒自物膝折伏せ』は、子鹿が前足を折り曲げて行儀良く座っている姿、『宇自物頸根突抜きて』は、鶺鴒うがいで使う鶺鴒うがいが鮎あしなどを捕らえようとして水中に深く首を突き刺している姿を表現してあるのね」

「あつ、なるほど子鹿と鶺鴒ですか。それほど敬けんな姿で、っていうことなんですね」
大地は感心したような表情で大きくうなずいた。

晴れやかな心

音江は、納得したような表情の大地を、目を細めて見ていた。

「いや、『感謝祈願詞』みやびのこしほは、奥が深いんですね」

「そうね。この『のりと』には、大神さまが天地を創造された歴史から、神さまに対する見方、神さまと人との関係、人生観や霊界観、それに人生の意義や目的、その上、生きるための心得までが、ギュッとつまっているのよね」

「全部わかったわけじゃないし、かじっただけという感じですけど、この『のりと』はホントすごいなあ〜って思いました」

「ふだん無意識に何気なく奏あげていると、形式的に終わってしまうけど、一言一句、意味を考え味わいながら奏上させていただくと、新しい発見もいただけるのよ。大本信徒は、本当にすばらしい『のりと』をいただいているなあ、って思うの。ありがた
いことよ」

「そうですね」

大地はうなずいた。

「じゃ、次『神言』かみことを説明しようかね？」

「あつ、いや、もう脳みそ全開で聞いて胸いっぱいになっちゃいましたんで、また今度お願いします」

大地は慌てた様子で返答した。

「いやね、冗談よ、大地君」

「何だ、人が悪いなあ、おばあちゃん！」

「お母さん、若い子いじめちゃだめですよ」

そう言いながら、恵子がリビングに入ってきた。

「これ、頂き物だけど、お母さんに渡してくれる」

手提げ袋を大地の前に置いた。

「ありがとうございます」

「少しだけど、さっきの“おやき”。たくさん頂いたので、お裾分けよ」

「母も喜ぶと思います」

大地は笑顔で礼を言った。

「それじゃあ、僕はこれで失礼します」

「気をつけてね」

「はい、ありがとうございます。あつ！」

と、大地は思い出したように言った。

「あの、神さまにごあいさつしてなかったの、お参りさせていただいていいですか？」

「おや、感心だね。どうぞ、こつちだよ」

音江は立ち上がって、大地をご神前に案内した。

「今、お明かりをあげるからね」

「すみません」

音江は、燭台しよくだいに火をつけ、火打ち石で切り火をして、神床に火をともした。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「お参りしてから、お明かりはそのままでもいいからね」

そう言いながら音江はリビングの方へ向かった。

大地は神床の前に進み、綾部の祖父母の家での朝夕拝時の松太郎の姿を思い浮かべながら、覚えている範囲の作法で天津祝詞あまつのりとを奏上した。

町村家を訪ねる前は、ここでお参りをするなど考えていなかったが、音江から

感謝祈願詞の意味を聴き、「このままでは帰れない」と思ったのだった。大地は、自身
自身の心境の変化にとまどつてもいた。

「祖霊さまは、かんながらたまちはえ惟神靈幸倍ませ」でいいのかなあ」

そう思いながら手を合わせた。お参りが終わり、不思議と気持ちが晴れやかになっ
ている自分がいることに気づいた。

「ありがとうございました」

大地は、リビングの入口から声をかけた。

「はい」

恵子の声でした。

「おばさん、おやき」ありがとうございました。遠慮なくいただいて帰ります」

「お母さんよろしくね」

「はい」

続いて音江も出てきた。

「おばあちゃん、ありがとうございました。とつても勉強になりました」

「どういたしまして、またいらっしやい」

「あの、久しぶりに小布施おふせに来たんで、北齋館ほくさいの近くをぶらつとしたいので、少しの間、車を置かせてもらっていいですか？」

「ええ、いいわよ。ゆっくり見てらっしゃい」

「ありがとうございます」

「じゃあ、いつてらっしゃい」

「はい」

大地は玄関を出て、庭に止めていた車の助手席に、恵子からもらった「おやき」の入った手提げ袋を置き、ドアを閉めた。町村家の前の道路も、行き交う観光客の姿があった。五分もあるけば、北齋館に行き着く。周辺には、栗菓子で有名な小布施堂や桜井甘精堂かんせいなどがあり、栗を使ったいろいろな商品が販売されている。近くの駐車場には大型バスが何台も並んでいて、今到着したのだろうかバスのドアから、大勢の人々があふれ出てきた。町並み修景事業に成功した小布施は、今では雑誌やテレビでもたびたび紹介されている。マスコミの影響力は大きく、この信州の小さな町を訪れる人の数は年々増えている。

「ここかあ」

大地は、北斎館の前から北へ向かう「栗の小径」の入口に立った。

「テレビで見たんで、一度歩いてみたかったんだよなあ」

そう思いながら、歩を進めた。

この「栗の小径」は、修景事業の一環としてつくられた遊歩道で、一面に栗の間伐材を敷き詰められたことから名づけられた。栗の木は水に強く、かつて鉄道の枕木は栗と決まっていたほどである。

木の柔らかさと温かみが足の裏から伝わってくるような感触で、大地は心地よく歩いた。

少し行くと高井鴻山こうざん記念館の門前に出た。高井鴻山は、江戸幕末に佐久間象山しやうざんをはじめ、当時の日本史を彩った思想家や、葛飾北斎かつしかなど文人墨客ぼっかくたちと幅広く交流があった文化人である。記念館には当時の面影を色濃く残す京町屋風の鴻山の隠宅いんたくとともに、鴻山が残した書画を展示してある。

大地は記念館を横目で見ながら、「栗の小径」を道なりに進んだ。ほどなくバス通りに出た。

信州の三月はまだ寒い日が多いが、今日は天気も良く、薄日が差ししていた。大地は

目の前の小洒落^{こじやれ}たバス停のベンチに腰を下ろしてしばらく辺りを眺めた。

「お父さん、おなかすいたよ」

「そうだなあ、何か食べようか？」

目の前を通り過ぎた家族連れの観光客の音が耳に入り、大地は携帯を取り出して時間を見た。

「あゝ、もう昼かあ」

時刻は正午近くになっていた。大地は、さっきまでの音江との会話を思い出しながら、なぜか綾部の祖父・松太郎のことを思い浮かべていた。

「そうだ」

大地は思い出したように、持っていたショルダーバッグの中を探った。

「あつ、やつぱり入れていた」

バッグの底に、綾部からの帰り際に松太郎からもらった文庫版の『生きがいの探求』があった。取り出して目次を見た。『失敗と進歩』という文字が目に残った。ページをめくって読み進みながら、今の自分の心情と重ね合わせていた。

『よく道を歩く者は、またよくつまずくのだ、靴もよくへるのだ、いろいろと旅の辛さも感じるのだ。しかしながら、つねに進むことを心がけている者は、つねに進むのだ。より多くつまずいた者は、より多くつまずかないようになるのだ。見ねば見えず、つかまねば握れず、一度、コツンと頭を打つてみないと、堅い程度はわからない。

世の中のことは、なんでもかでも、やってみなければ合点がてんがいかない。合点がいかなば魂の進歩はない。何ごとでも腹の底から、なるほどと、われとわが身に合点するまでは、だれでも思う存分したい放題をやってみればよいのだ』

「俺は今、つまずいてばっかりだけどなあ…」

大地は、就職活動が思うようにいかない今の自分が置かれた状況を疎ましくさえ思っていた。

「一霊四魂いちれいしこんと五情ごじょうの働きて、自分の魂を磨かないといけないんだろうけどなあ…」

音江から聞いた「感謝祈願詞」の意味は自分なりに理解したつもりだったが、一人になり、ふと現実に戻ると、目の前に「就職」という壁が迫っている。

「『生きがいの探求』にも「合点がいかなば魂の進歩はない」って書いてあるし、とにかく納得できるまでやるだけやるかあー！」

そう心の中で意を決してベンチから立ち上がり、一つ深呼吸してから歩き出した。

ほどなく町村家まで戻った。

「ありがとうございます」

大地は玄関を開け、奥に向かってお礼を言った。

「は〜い」

恵子の声が返ってきた。

「もう帰るの？」

そう言いながら恵子が玄関まで出てきた。

「はい、お世話になりました。これで失礼します」

「お昼ごはん、食べていったら？」

「いえ、午後から就活に行かないといけないので」

「あら、そうなの、たいへんね」

「まあ、自分で動かないと、何も始まらないので」

「そうね、がんばってね」

「はい、失礼しました」

「気をつけてね」

「ありがとうございます」

大地は車に乗り込み町村家を出、朝来た道を自宅へ向かって帰途についた。

就活の道

雪をかぶった北信五岳を車窓からのぞみながら、大地の車は千曲川ちくまがわに架かる小布施橋おぶせを渡った。日本で一番長い川である信濃川は、新潟県域から長野県にさかのぼると千曲川と呼ばれる。その昔、川中島の合戦があつたのは、ここからさらに十五キロメートルほど上流である。

ふだんは穏やかな流れの千曲川だが、二百七十年ほど前の一七四二（寛保二）年八月の大洪水では、水位が一〇・九メートルに及んだという記録がある。「天災は忘れたころにやってくる」という諺ことわざがあるが、過去の災害を後世に伝えるために小布施町には、その水位を示す「千曲川大洪水水位標」が立っている。

小布施橋を渡りきり、道なりに進むとアップルラインと呼ばれる国道十八号線に当たる。交差点の信号が赤になつたのを幸いに、大地は京子にメールを打った。

“町村さん宅を出ました。三十分で帰ります”

大地の自宅では、京子が昼食の支度をしていた。テーブルの上に置いていた携帯のメール着信音が鳴った。京子は携帯を開き、大地から届いたメッセージにすぐに返信し、

携帯を閉じてつぶやいた。

「どうだったかなあ？」

実は、京子には一つの思いがあった。大地が町村家に行けば、きっと音江から信仰的な話を聞かされるだろう。そのことが今、就活で悩んでいる大地の心に、いくらかの光となるのではないか、そう期待していた。

運転中の大地の携帯が鳴った。

ッ
了解！

京子からのメールが返ってきた。

「相変わらず短いメールだなあ」

大地は苦笑いしながら、携帯をポケットにしまった。

「さあ、早く帰って、就活に行かないと」

大地は自宅に向かって車を走らせた。

三十分足らずで自宅に着いた。ガレージに車を入れ、自分のバッグと恵子から渡された手提げ袋を持って家に入った。

「ただいま」

「おかえり」

「これ、おばさんから」

「あら、ありがとう。何かしら」

「おやきだよ」

「まあ、うれしい。食べる？」

「いや、僕は町村さんとこでいただいたからいいよ。お母さん、食べたなら」

「そうね、じゃあ三時のおやつにいただこうかなあ。今、お昼にするからね」

「うん」

大地はいったん二階の自分の部屋にもどり、洗面所で手を洗ってテーブルに着いた。ほどなく京子が昼食をしつらえ、二人で向かい合った。

その時、大地は綾部で松太郎と交わした約束を思い出した。

へおじいちゃん、僕もこれからできるだけ食事の時には、三首のお歌を拝誦するようにします」

と言ったものの、なかなか実践できていない後ろめたさが心にひっかかった。大地はせめてもと思い、両手を合わせた。

「いただきます」

京子もそれに合わせるように「いただきます」と言った。

「大地、いただきます」って、どんな意味か知ってる？」

「あー、それくらい知ってるよ」

と言いながら、大地は松太郎から聞いたうんちく蘊蓄を語った。

「いただきます」という言葉は、食材の命をいただくということ。だから人間は、自然から命をいただきながら、自分の命をつないでいるというわけ。それに、いただきます」という言葉は、外国語にはあまりないんで、日本人の文化として誇るべき言葉だと、僕は思うなあー」

「へえ、よく知ってたね」

「社会人として、それくらい当たり前だよ」

大地は笑いながら言った。ネタばらしはしなかったが、京子には大方の察しはついていた。

「ところで恵子さんとか、どうだった？」

「ん、元気そうだったよ」

「おばあちゃんも？」

「おばあちゃんは元気元気！ しっかりお話し聞いてきたよ」

「どんな話？」

「大本の『のりと』の『感謝祈願詞』みやびのことばの意味を教えてくださいましたねー」

「へえ、で、どんなこと？」

「いやあ、全部正確には言えないけど、とにかく勉強になったよ」

「あらそう、良かったね」

そう言いながら恵子は内心、音江が自分の期待に応えてくれたことに感謝した。

「ごちそうさま。これから面接に行ってくるよ」

「そうなの。がんばってね」

「うん、そんなに遅くはならないと思うけど…」

「気をつけてね」

大地は自分の部屋でスーツに着替えて、面接を取り付けていた長野市内の企業に出

向いた。案内された部屋に入ると、すでに数人の大学卒とおぼしき青年が待っていた。順番を待ち、無事面接を終えたが、手応えはなかった。

「またダメだろうな」

そんな消極的な気持ちで面接会場から外に出ると、暮れなずむ信州の三月の風が、いつもより冷たく感じた。

大学の卒業式も終わり、四月、五月と無情に時間が過ぎていった。なかなか就職先が見つからない。家ではできるだけ明るく振る舞っていた大地だったが、部屋で一人になると気持ちは落ち込んでくる。

「まあ、何とかなるよ」

そう言う京子の生来の楽天的な気持ちが、せめてもの救いだった。父親も大地に同情するものの、就職できないことを責めたりはしなかった。

気持ちがめいりそうになると、祖父・松太郎からもらった『生きがいの探求』を開くのが常になっていた。

「世の中、思うようにいかないよなあ〜」

と思いつながら、目次を開くと、『世の中とは、』という文字が目にとまった。大地は

そのページを開き、読み進めた。

『世界は無限にあるものを、何を苦しんで人々は、たわいもないことに執着し、懊惱おうれうするのだろう！

楽をしようという気持ちですべて、どうせこういう世の中であるから、はじめから、苦勞をしようと覚悟をきめてかかることだ。そうすれば、少々のことがあっても、ありがたいありがたいでやっていけるものである。

目は目、鼻は鼻、口は口、みなそれぞれの職能がある。目をして鼻の代わりをつとめさせるわけにはいかず、鼻をもって口の代わりをさせることもできない。人おのおのにその長所がある。他人がまねのできない、その人独特の能力を持っているものである。ゆえに、お互いに相互の長所を学び、これをもってあい助け合っていくならば、自然に世の中は円満無碍むげにおさまっていくのである』

「僕に、他人がまねできない能力があるんだらうか？」

そう自問してみた。が、今の大地には答えは見つからない。

「あゝ、明日から六月かあ。とにかく就職先を探すしかないな」

大地は思い直し、『生きがいの探求』を閉じてベッドに横になり、気分転換にと、コミック本を手にとった。

友人が貸してくれた『宇宙兄弟』。期待せずに読み始めたが、これがなかなかおもしろい。

謎のUFOを目撃した主人公の南波六太と弟の曰々人が、一緒に宇宙飛行士になろうと誓い合う。ところが、弟の曰々人の方が先に宇宙飛行士となり、初めて月面に立つ日本人として選ばれる。一方、夢をあきらめていた六太は、紆余曲折を経た末に、曰々人からのメッセージを受けて、再び宇宙飛行士を目指し始める、というストーリーがコミカルながら感動的に描かれている。

おつちよこちよいだが夢をあきらめない主人公・六太の姿が、今の大地には共感できた。

「俺も六太を見習わないとなあ」

そう思いながら読んでいるうちに、いつの間にか眠っていた。

翌日、午前と午後、それぞれ一件ずつ面接があった。午前中は長野市内、午後は中野市にある中小企業だった。面接はそつなくこなしたが、またしても手応えはなかった。

日が暮れるころ、大地は自宅に戻った。

「ただいま」

元気のない声だった。

「おかえり、どうだった？」

「んー、たぶんダメだな」

「あら、そう。残念ね」

「お母さんは、いつも軽く流すね」

「そんなことないわよ、これでも心配してるんだから」

「明日またハローワークに行つてくるよ」

大地は、ひとつため息をついた。

五、愛と信

生きがい講座

大学を卒業して三カ月ほどが過ぎた。大地は長野駅に近いハローワーク長野で求人案内を探し、窓口の担当者いろいろな相談しながら就活を続けていた。それでもなかなか思うようにいかない現実があった。就職氷河期といわれる時代に当たった不運を恨みもした。

「どうしてうまくいかないのかなあ」

時間の経過とともに大地の心の中には、焦りの色が濃くなっていた。

そんな時、長野市内に大手のホテルが開業する予定があり、ベルボーイを求人しているという情報を耳にした。大地は早速応募した。数日後の面接の結果、開業前からの研修を含め就職がかなうこととなった。自分が求めている仕事かどうかは、大地自身わからなかったが、せっかくのチャンスだと考え、ホテルマンとしての道を歩む決意をした。家族も喜んでくれ、大地もほっとする思いであった。

ところが一カ月後、ホテルの開業が大幅に遅れることがわかった。いつになるかわからないものを待つ気もなかった大地は、内定を蹴って振り出しに戻すことにした。

「ついてないよなあ〜」

再び就活である。長野市内にはほかに、少し離れた篠ノ井駅前と、隣の須坂市にもハローワークがあった。大地は気分転換のつもりで、ハローワーク須坂を訪ねてみた。

「あれ、こんなところがあったんだ？」

大地の目にとまったのは、パン屋等で使う備品を扱う会社の求人だった。

「家からもそう遠くないし、応募してみようかなあ」

窓口で相談すると、すぐに相手先に連絡してくれ、二日後の面接を取り付けられた。大地は運命的なものを感じ、指定された日時に会社を訪ねた。

「よしだ工房」という看板が掛かった入り口から入り、事務所の戸を叩いた。作業着姿の男性が出て来た。

「ああ、聞いてるよ。専務たちに連絡してくるから、ここで待ってて」

そう言って小さな応接室に通された。面接は何度も経験していたせいか、以前ほど緊張しなくなっていた。

「なるがままよ」

という心境で臨んだのがよかったのか、「じゃあ、一週間後の月曜から来てもらおうかな」ということになり、あっさり決まってしまった。

自宅に帰って報告すると、「あら、良かったね」と、京子がたいそう喜んでくれ、大地も安心した。その後、よしだ工房のことをいろいろと調べてみると、地元でも優良な企業であることがわかった。

「大地君は、いいところに就職できたね」

よしだ工房を知っている人は異口同音にそう言っただけで祝ってくれた。

大地は主に営業を担当するようになった。最初は先輩について得意先を回ったり、新規開拓に携わっていたが、一年もすると一人でまかされるようになった。大地自身、自分が営業に向いているらしいことを、仕事をしながら自覚するようになった。

「どう、仕事楽しい？」

京子から聞かれた。

「うん、楽しいよ。今日も一軒、新しく開店するパン屋さんに備品を納品しに行ったんだけど、お店の人と話をしていると楽しいんだよ。やりがいもあるしね」

この時、大地はこの仕事をずっと続けていこうと思っていた。

しかし、二年が過ぎたころ、本当は営業に向いていないのでは、と思うようになった。「このままでいいのかなあ？」

ふとそう思うことが多くなってきた。

「どうしたの？ 何だか元気がないみたいだけど、カゼでもひいたの？」

大地の心の変化を京子は感じていた。

「んゝ、ちよつとね」

「ちよつと何よ？」

「仕事はやりがいはあるんだけど、何か違うんだよなあゝ」

「せっかく順調に仕事できてるんでしょ。北海道や九州にも出張したり、先月なんて、

韓国にも行ったじゃない」

「まあ、韓国では空港を出た途端に、乗ってたタクシーが追突されて、初海外の初訪

問先が、病院だったけどね」(笑)

「そうだったわよね、でもあの時は大したことなくて良かったよね」

京子は笑いながら言った。

営業先でお客さんと話をすることは楽しかった。しかし、いざ商品を薦める段になって、相手が望んでいる商品に關し、自社より他社の方に良い商品があることを知っている、つい相手の立場に立ってしまい、他社製品を薦めてしまう自分がいた。

「これじゃあ、会社のためにはならないよなあ。営業失格だ」

そんな大地の心情が顔に表れているのを、京子は少なからず心配していた。

夕食の前、京子が大地に一枚のチラシを渡した。

「今日、恵子さんが来てね。町村のおばあちゃんからだと言って、このチラシをいただいたのよ」

見ると“生きがい講座”とあった。

「私はちようど用事が入っている日で、恵子さんにお断りしたら、大地君は行けないから、って。おばあちゃんが大地君にも声をかけてって言うておられたそうよ」

「町村のおばあちゃんが？」

「そう。で、どう？ 行ける？」

「いつ？」

「半月後の日曜日ね。お休みでしょ」

「たぶん」

「松代^{まつしろ}荘で午後一時からみたいね」

「どんな話なの？」

「えーと、死をみつめて今を生きるゝ霊界と魂の関係ゝ」ってタイトルだから、霊界の話かな」

大地は以前、祖父の松太郎から聞いた「みたままつり」の話の思い出していた。

「霊界の話ならおもしろそうだね」

「じゃ、行くでしょ」

「ああ、行けたら行くよ」

「じゃあ、恵子さんにそう電話しとくね。おばあちゃんもよろこぶよ、きっと」

「ちよつと母さん、まだ行けるかわからないから…」

そう言い終わる前に、京子は受話器をとって、町村家に電話を入れた。

「もう、母さん。気が早いんだから」

“生きがい講座”開催の日は、朝から夏の太陽が照りつける好天に恵まれた。会場となった松代荘の駐車場はすでに多くの車が止まっていた。車を降りたところで、町村恵子と音江に出会った。

「おばさん、こんにちは」

「あー、大地君よく来てくれたね」

「おばあちゃん、お久しぶりです。お元気でしたか？」

「ありがとう、今日は来てくれてうれしいよ」

「はい、休みでしたから」

「さあ、中へ行きましょ」

二人にうながされるまま、大地は施設内に入った。講座会場にはすでに三十人以上の人が集まっていた。大地たちは空いている席に座った。地元の大本長野主会主催で開催されるこの講座は、年一回開催され、今回の講師は大本本部の高村浩一東海教区特派宣使だった。

高村特派は、昨年の東日本大震災以降、さまざまな価値観が大きく変わってきていると語り、

「目に見える世界もさることながら、目に見えない世界を感じ、その世界と人の魂や心とがどのようにつながっているのかを知ることが、人生にとって大きな糧になりま
す」

と言って、日本人が古代から持ち続けてきた死生観を説き、大本で示されている霊

界の様子をわかりやすく説明し、

「死や霊界の様子を知ることにより、今をどう生きるかということが、おの自ずと見えてくるのではないでしょうか」

と、力強く語った。

大地は、松太郎から聞いていた予備知識があったせいも、理解できる部分が多く、講師の話に引き込まれていった。

質疑応答でも、参加者と講師のやり取りがおもしろかった。質問をしてみようかと思っただけ、気が後れしてやめてしまった。

予定されていた二時間があっという間に過ぎ、大きな拍手で講座が終了した。

「ちよつと先生にあいさつしてくるね」

そう言っただけで音江が高村特派のそばへ歩み寄っていった。音江の「ついてきなさい」という目配せを感じ、大地と恵子も後に続いた。音江は親しそうに高村特派にあいさつをして、大地を紹介した。

「大地君、何か質問あるでしょ」

音江が突然話をふって来た。大地は驚いたが、講座の中で気になった言葉を質問し

てみた。

「あの、お話の中で『愛と信』が大切だとおっしゃっていましたが、どういうことか、もう少しかかっていたと思っただんですが……」

「そう、とても大切な部分に興味を持ったんだね。講座の中ではあまり深くお話しできなかつたけど、詳しく話してもいいかい？」

高村特派は笑顔で応えた。

「時間は大丈夫ですか？」

音江に訊いた。

「私は大丈夫ですよ。先生はいいんですか？」

「私はもちろん大丈夫ですよ。こんな青年からの良い質問ですからね。しっかりと答えたいですし」

「お願いします」

「この会場は片付けると思っていますので、十分後くらいにロビーでいかがですか？」

「そうしましょう」

音江はそういうと、大地と恵子といっしょにロビーへ向かい、中庭の見えるソファに腰を下ろした。

愛善と愛悪

しばらくして、片付けをすませた長野主会の役員とともに、高村特派がロビーの方へ歩いてきた。高村は、会長はじめ役員と挨拶を交わしたあと、大地たちが座っているソファの方へやって来た。三人は立ち上がって高村に会釈した。

「先生、もうすみましたか？」

恵子が訊ねた。

「すみません、お待たせしました」

「どうぞお掛けください」

「はい、ありがとうございます。会場の大広間は三時半までの借用だそうで、急いで片付けてきました」

高村が座りながら言った。

「ほかのご用事があるんじゃないですか？」

そう音江が訊くと、高村は笑顔で答えた。

「いえ、あと二日ほどは長野にいますので、大丈夫ですよ」

「そうですか、先生もお忙しいですね」

「いや、ありがたいことです。それにしても今日は、最終的にちょうど五十人の方が来てくださったそうですよ。そのうち、一般の方が十一人いらしたそうですね」

「いつもより大勢来ていただいたようで、びっくりしました」

「主会の皆さんが、お声かけをがんばられたのでしようね。ほんと、ありがたいことでした」

そう言いながら、高村は大地の方へ視線を向けた。

「雨宮君だったね。さて、質問をうかがいましょうか」

「はい、よろしくお願いします」

大地は頭を下げた。

「愛と信しんが大切なことについてだったね」

「はい」

「ということは、正守護神と副守護神のところの話かな？」

「はい、そうです」

大地はそう言いながら、今日の講座前に配られた資料袋の中から講座レジュメを取りだし、そこに書き込んだメモを見ながら話を続けた。

「人の靈魂は精靈と言つて、『精妙なる靈』のことだと、初めて知りました。で、その精靈は、ふだん『自分』とか『自分の心』と認識している『われなる精靈』であつて、それと肉体とを『この世』で守るために、正守護神と副守護神がついているということでしたね」

「良く理解してくれているね。その通りだよ。もちろん、便宜上わかりやすいようにお話ししているけど、精靈の働きは実際、単純なものではないと思うんだよ。人の心つて複雑で、しょつちゅうコロコロ変わるものだからね」

「そうですね。僕の心なんかいつもコロコロ転がり回つてますね」

「みんな同じだよ」

高村は、やさしく答えた。となりに座っている音江と恵子も頷うなずいていた。

「『愛』と『信』は、正守護神と副守護神を通じて『われなる精靈』に働きかけるといふことでしたが、その際に、正守護神の愛は善よい愛で、信は真まことの信。反対に、副守護神の愛は悪い愛で、信は偽いつわりの信、ということでしたね。この部分が分かつたような分らないような感じだったんです」

大地はすまなそうに言つた。

「いや、それは申し訳ないなあ、私の説明不足だったんだろうね。じゃあ、もう少し

し順を追ってお話するね。まず、人の肉体と靈魂の関係だけど、そのイメージを例え話で言うと、ちょうど重くて大きな着ぐるみを着て動き回っているようなものと思ってもらうといいかね。人が肉体の死を迎えると、その重くて不便な肉体を脱いで、本来の魂だけになって、あの世で自由に行動できる状態になれるんだね」

「なるほど、今、ゆるキャラブームで、あちこちで着ぐるみのキャラクターが登場してますから、わかりやすい例えですね」

と大地が言うと、

「ひこにゃんとか、くまモンね」

横から恵子が言葉をはさんだ。

「そうですね、個性的でおもしろいキャラクターがたくさんあるでしょ。人間の肉体も同じように、それぞれの特性がありますからね」

高村が返した。

「なるほど、そうですね」

大地が相づちを打った。

「それからね…」

と高村は大地の方を見て、別の例えを話し始めた。

「精霊と守護神と肉体、それと人生との関係を例えてみるとね…」

「はい」

「人生はよく旅に例えられるけど、人はオギャーと生まれてきてから、車という肉体に乗り込んでハンドルを握り、人生というドライブをするようなものなんだよ。ゴールは、もちろん死ということになるんだね。そして、ゴールテープを切ると車を降りて自由に歩き回ることができるんだけど、それまではずっと車を運転しているんだね」

「長いドライブですね」

「ハンドルを握って運転しているのが、“私”の本体である“われなる精霊”なんだよ」

「つまり“自分の心”がドライバーということなんです」

「そして助手席に乗っているのが、正守護神で、ドライブするための正しい道案内をしてくれる役なんだよ」

「ナビゲーターということですね」

「そういうことだね。ところがもう一人、後部座席に乗っているのがいて、それが副守護神なんだ。これがドライブをサボらせたり、危ない方向へ連れていかうとするところが多々あるんだね」

「悪い奴やぶですわね」

「そう、でもね、これがいなければ、私わたしは、ただひたすら運転してしまおうのたいへんなことになるんだよ。たまには休憩したり、ガソリンも入れないと車自体が走れなくなってしまうよね。だから、副守護神の最低限の誘導は、絶対必要なんだよ」

「副守護神食たいたい寝ねたいが関せきの山やま」
ってお歌がありましたね」
音江ねえが言った。

「町村さん、尊師さまのお歌ですわね」

「へえ、おもしろいですわね」

大地だいちが感心かんしんしたように言った。

「それでドライバーは、適度しどくに後ろうしろの同乗者どうじやうしやの言うことを聞きながら、暴走ぼうそうすることなく、青空あおぞらのもと、ナビゲーターの案内あんない内で安全あんぜんなドライブドライブを続けていけるんだよ」

「そうすると楽しく人生じんせいという旅たびができるというわけですね」

「そういうことだね、雨宮君あめみや。そして、空そらには太陽たいやうが輝かがやき、夜よになると月つきが照あるように、常に神さまから守護神しゆごしんを通じて、愛あいと信しんが注つがれているんだよ。で、それが正守護神せいしゆごしんを通じた場合は、愛あいは善ぜんき愛あい、つまり愛善あいぜんとなるし、信しんは真まことの信しん、信真しんまこと」

となつて、[〃]われなる精霊に注がれ、ドライバーのより良き力となるんだよ」

「愛善と信真ですか…」

大地は、どこかで聞いたことがあるような言葉だなあ、と思ひながらつぶやいた。

「その反対が、愛悪と信偽しんぎで、副守護神を通じると同じ愛と信でも変わつてくるわけね。別の言葉でいうと、[〃]われよし、つよいものがち[〃]ということだね」

高村の「愛悪」という言葉に、大地は…おじいちゃんに訊いた言葉だった…、と思ひ出した。

「愛悪というのは、利己的な愛、自分のための愛ということですよ。で、その反対が、人のための愛で、それが愛善ということですね」

「へえ、雨宮君は察しいいね」

「おじいちゃんの受け売りです」

「おじいちゃんって？」

「綾部の母の実家の梅木松太郎といいます」

「ああ、あの梅木さん。なんだそうだったのか、雨宮君は梅木さんのお孫さんなのか」

「ご存知なんですか？」

「よく知ってるよ。近畿第一教区の特派をしていた時にはお世話になったからね」

「そうでしたか」

「そうかそうか梅木さんのね……」

高村は大地の顔を見ながら、嬉しそうに何度も頷いた。

「先生は、綾部の特派もされていたんですね」

音江が訊いた。

「はい、東海教区に赴任する前でした」

高村は音江にそう答えながら、大地の方に視線を戻した。

「話を続けるけど、人生において、『愛』と『信』は、必要不可欠であって、とても大切なものなんだね。でも、その向け方、使い方次第で、大きく中身が変わってくるものなんだよ。雨宮君がいうように、同じ愛でも、純粹に人のために向けられた愛もあれば、自分のための自己愛になったりと、いろいろ違ってくるんだね」

高村は、大地の真剣な眼差しまなざしにさらに言葉を続けた。

「例えば、カゼを引いて熱を出して寝込んでいる妻を、夫である私が看病していると
するよ」

「はい」

「その時に、妻の身になって、ただひたすら早く良くなってほしいと願い、病院に連れて行ったり、お粥かゆを炊いたりして看病していたとしたら…、これは愛の善だよ」

「はい」

「じゃあ、看病はしているんだけど、心の中にこんな思いを持っていたとしたらどうだろうか？」

「……」

「早く良くなってくれないと、俺の食事が困るからなあ。しょうがない、がんばって看病するか」

「なるほどそういう自己中心的な愛が『愛悪』ということですね」

大地は合点がいったように笑った。

「あるある。うちの主人がそうかも」

恵子が笑いながら言った。

神に通ずる門戸

「私が熱を出して寝てた時に主人は、『お〜い大丈夫かあ？　なあ、晩飯どうする』だつて。もう、腹立つてしょ。高村先生、どう思います」

恵子が身を乗り出すようにして言った。

「あゝ、それはちよつとね」

高村は苦笑いしながら言った。

「わかりやすい『愛悪』ですね」

大地が言った。

「すまないね、親の躰しつげが悪かつたのかねー」

自分の息子のことである。音江も苦笑いしながらすまなそうに言った。

「ホントですよ、おばあちゃん」

恵子は、そう言いながらも「冗談ですよ」と音江に目顔で知らせた。

大地は二人のそんな様子から、嫁姑関係も実の親子のような仲で、恵子が夫の性格をも包み込みこんでいるようなほほ笑ましさを察していた。それは、高村も同様であった。

高村は話題を変えた。

「それから、信ということだね。信で『まこと』と読むけど、神さまは『まこと』の塊で、しかも『まこと』の上にも『まこと』。だから信の真で『信真』というんだよ。でも、信がさも真のように思えていても、そこに偽りが隠れているとしたら、それは『信真』ではなく、信を装った偽りになる。これが罪深い『信偽』となるんだよ。例えば選挙で、『私が当選のあかつきには、こうします』、なんて言っているけど、いざ当選してしまうと手のひらを返したように、『状況が変わりました』、とか言って、平気で公約を破る政治家がいたりするけど、あれなんかは罪が深いと思うよね」

「なるほど、それも保身であったり、自分のためなんでしょうね」

「そうだね。国民の方を向いてないんだろうね」

「でも、この世の中では、嘘うそも方便とか言って、相手のために嘘をつかないといけないという場合もあると思うのですが」

「確かにそうした場合もあるね。そんな時は、必ず相手に対する深い愛がともなっていると思うよね。思いが愛善であれば行動は信真となり、神さまのみ心になっっていることになると思うよ」

「なるほど、でも自分の思いや行動が、今おっしゃった神さまのみ心かどうかっていうのは、どうしたらわかるんでしょうね」

「鋭い質問だね、兩宮君」

高村は少し間を置いて話を続けた。

「神さまのみ心を知るためには、まず神さまがいかなる存在なのかを知ることが大切だと思うね。時々、『神さまがいるというなら、納得できるように見せてくれ。頭をたたくなり、耳をひっぱるなりして教えてくれないか』、なんて言う人があるんだよね。手っ取り早く知りたいということかもしれないけど、これはとても幼稚なことなんだよ。ちょうど幼稚園の子供が、幼稚園へ行くのはばからしいから、大学の講義をすぐ聞かしてくれと言っているようなもので、実際、そういうわけにはいかないんだよ」

「目に見えないから信じないという人でしょうね」

「この世の中には、目に見えないけど存在しているものは、たくさんあるよね」

「そうですね」

「空気や電波、光だって人間の目に見えない波長のものはたくさんあるし、音でも人間の目には聞こえない周波数の音波はあるわけだよ。ましてや、神さまは、一人の

人間が生まれるずっと前からおられ、自分が死んだあとでも永遠にいらっしやる存在でしょ。一切は神さまの中に住まわしていただいておりますながら、あまりに大きいために、わからないんだよ。私のお腹みかの中なかにいる微生物は、私の体の全体を外から見ることばできないのと同じなんだよね」

「あつ、そういえば、以前綾部の祖父に、人間の力は神さまの力に比べると、虱しらみの眉毛まゆに巣げくう虫むしの、そのまた眉毛まゆに巣げくう虫むし……という聖師さまのお示し（注：『靈界物語』第五卷）を覚えてもらったことができました」

大地は思い出したように言った。

「そう、あのお示しもおもしろいね。時間的なことでも、人間の一生は、神さまの歴史からするとほんのちよつとの時間しかないんだよ」

「とくと…」

「五十六億七千万年の神さまの歴史を、この世の一年に置き換えてみると、天地がわかれてできたのが八月六日くらいになるんだ。さらに、人類の誕生は、八百年前とすると、十二月一日になるし、二〇一二年前の紀元ですら、十二月三十一日の午後十一時五十九分四十九秒くらいなんだよ。八十五歳まで生きたとしてもわずかに〇・五秒に満たないくらいなんだよ」

「そんなに短いんですか」

「人の一生は悠久の神さまの歴史からみたら、まばたきしているくらいなものなんだよ」

「ん〜」

大地は感心するように頷いた。

「だから、神さまは目で見る存在ではなく、感じる存在なんだね。自分自身が神さまの懐ふかの中にいるわけだから、そのことを自分の身のまわりの自然や出来事を通してでも気づかないといけないわけだね。この理ことわりがよくよくわかってくると、神さまを感じられるようになるし、花一輪見ても、神さまのみ心がわかるようになる」と示されているんだよ」

「具体的にはどうしたらいいんですか？」

「本来、科学も芸術も宗教も、その目的は神さまの存在を明らかにし、霊界の実在を知ることにあるんだ。ちょうど高い山への登山と同じで、頂上は一カ所でも、登山道や登り方に違いがあるのと同じなんだ。だから、大本の教えを通して知るのであれば、たくさんあるご神書を拝読して、神さまのみ教えに触れることがいちばんだと思うね。」

それから、先輩方の信仰的な話を聞くことなんかも大切だね」

「大地君は、おばあちゃんの話も、辛抱してよく聞いてたよね」

恵子が言うと、

「おや、辛抱してたのかい？」

と音江が大地に聞いた。

「いえ、そんなことないですよ。おもしろかったですよ。おばさん、変なこと言わないでよ」

大地が笑いながら言った。

三人の様子を横目に、高村は鞆かぼんの中から持っていた『信仰叢話そうわ』を取り出して、後の方のページをめくり、大地の方へ向けた。

「ここに、さっき言った神さまを知る方法を、尊師さまがお示しになっているんだよ」
大地は身を乗り出して見た。

『神に通ずる門戸として三つあります。それは善とか愛とかいう方面から神を感じる道、これは宗教あるいは道徳であります。真理、道理によって神を感じるの、これ

は学問であります。美によって神を感じるのが、これが芸術であります。この三つがある。そしてそれぞれ特長がある。

愛とか善とかによって神を感じるの、これはよほどその人の心が利己的でなしに、高尚であり進んだ心境の人でなければ、そこまでゆかない。ただ愛と善というても、その人自身の愛善ではだめである。宇宙の愛善、神から見た愛善でなければならぬ。利己的な愛善は神の目から見た愛善にならない。愛善から神を感じる人は少ないのであります。よほど飛びはなれた修養のできた人、天稟てんげんの人でなければ、そういうことはむづかしい。

つぎに、真理または道理によって神を感じる人は——これもそう全部はゆかない。人間のうちの何割かはそういうふうにしてゆきましょう。が、一般の人全部が道理や真理によって悟ってゆき、だんだんと神へ行くというのはなかなかむづかしい。いまの世では相当の学者と称せられる人でも、魔道に陥っているから、かえって違ったところに行っておったりして、ほんとうの真理に行く道でなしに、迷い道に行っているから神を感じない人が多い。

ところが、美によって神を感じる——これは誰でもはいれる。爺じいさんでも婆ばあさんでも、

子供でも学者でも、女でも共通に容易にはいれるものがこの門であります』

大地はここまで目を通して言った。

「美しいものをたくさん見たら、神さまのみ心を知ることができるとかあ！」

宗教と芸術

「そうよ、大地君。きれいなものは天国に相応しているからね。美しいものから神さまを感じることができるのよ」

恵子の言葉に、高村と音江も頷うなずいた。

「大地君、美」と聞いて何を連想するかなあ？」

高村が尋ねた。

「美ですか？　そうですね、美術品とか美術館、ン、芸術かなあ？」

大地が少し首をひねりながら独り言のように言った。

「そうだね、芸術を連想するよね。実は、大本の教えの中で、特徴的なものの一に、”芸術は宗教の母”という教えがあるんだ」

「えっ、宗教が芸術の母ということじゃなくて、その反対ですか？」

「そう、芸術が宗教の母ということなんだよ」

「そうなんですか？」

「もつとも、単なる芸術品や美術品が宗教を生んだというのではなくて、もつと大きな意味で示されたことなんだよ」

「とていつたか」

「聖師さまはこの大宇宙そのものが神さまの大芸術であり、私たちのまわりにある自然の造形も、神さまが作られた芸術作品だとおっしゃっているんだよ」

「なるほど、確かに日本の自然の中にある美しい風景やそれを形作る自然を見たときに、*“芸術だなあ”*と思つことがありますね」

大地は頷きながら言った。

「信州のアルプス連峰や上高地だつてそうだし、ここの松代にある皆神山みなかみやまだつて人間が作れるものじゃないわよね」

恵子が口を挟むと、音江も続いた。

「長野には、きれいな風景はたくさんあるねえ。でも、それを当たり前だと思つていたら、神さまのを感じることもないのかもしれないねえ」

「町村さんがおっしゃるように、きれいな風景を前にしたときに、どう心を向けるかということが肝心だと思うね。昔テレビCMでフィルムメーカーのコマーシャルがあつて、*“旅の思い出を、心のフィルムに残してください”*というコピーがあつたけど、あれはなかなかの名言だと思つたね。今は、誰でも携帯カメラで簡単に写真が撮れる

けど、美しい風景に出合ったとき、素晴らしい芸術作品を目の前にした時、カシヤツと写真を撮るんじゃないくて、そこから何を感じるかという感性が必要だと思っただよ。美しいものをたくさん見ただけで、神さまの心を知ることができんじゃないくて、どういう心で見、どう感じるかが大切だと思うね」

「目の前にあっても、気づかない人は気づかないということですか？」

「その通りだよ。見ようとしなかったり、感じようとしないと、自分の目の前にあるのに、目に入らないんだ。例えば、探し物が目の前のテーブルの上にあるのに、その周りばかり探して、しばらく見つからなかった、なんていうことはないかなあ？」

高村が尋ねた。

「あるある、ねえ、おばあちゃん」

「ええ、しょっちゅうだよ」

恵子と音江が言った。

「たまにありますね」

「大地君はまだ若いからないでしょ」

恵子の言葉に、笑いながら高村が話を続けた。

「それと同じことが芸術と宗教の関係にもあるんだよ」

「そうなんですか？」

「聖師さまは、美は神さまの『姿』で、宗教は、神さまの『心』だと示されていてね。神さまのお姿だけを求めて、その根元にある神さまの心を見ようとしなければ、いつまでたつても、感じる事ができないということなんだ。そうそう、この『信仰叢話』の中に、確かお示しがあつたなあ」

そう言いながら、高村は大地の前に置いていた『信仰叢話』を手に取り、ページをめくってから大地の前にもどした。

「さつき読んでもらった『神に通ずる三つの門戸』の続きの最後の部分、ここね」

大地は、『信仰叢話』を取り上げ、高村が指さしたところから声に出して読んだ。

『われわれが信仰と同時に芸術方面を奨励しているのは、いわれがあり、必要があり、わけがあるのであります。芸術的な気持ちのある人は、簡単な酔生夢死すいせいむしの生活でなしに、非常に味わいあり、うるおいある生活ができ、世界を非常に広く旅行し、奥ふかく世界を領有したことになる。趣味のゆたかな人、美を感じることの多い人は、そういう境地に居住し得る。また神さまの神秘とか、世の中の微妙なこととかを、美によつて

本能的に経験的に、すぐ自分が体得し得るようになる。

神さまのおことばの中に、

「真の生活は左右の両手に宗教と芸術とをにぎって、あくまでも世間的生涯、すなわち職業を芸術的に生かすために信仰をすすめ、楽しく、おもしろく、この世の旅をせざれば人間として生きがいなし」

と申されているのであります。

信仰的な方面を説く教おしえはありますが、そればかりでは楽しみがない、ゆとりがない。カンカンになつて一生懸命になるばかりではいけない。そこに生活に興味を覚えさし、うるおいを与えるものがなければならぬ。

信仰を一面やるとともに、また一面に、芸術的な余裕ある生活を営むことが大切であります』

「なるほど、人生を楽しく送るためには、芸術と信仰が必要だということですね
大地が言った。

「芸術だけでもダメ、宗教だけでもダメ、両方が必要ということなんです」

恵子も感心した表情で言った。

「食事に例えると、宗教が主食のご飯だとすると、芸術は副食のおかずのようなものです。どちらか一つでは続かないでしょ。両方のバランスが大切ということでしょうね」

高村が言った。

「なるほど、確かにそうなんでしょうね。でもね先生、芸術的なことって主婦はなかなか忙しくて……」

「恵子さんもうちでお茶の稽古をしたらいいのよ」

音江が恵子に向かって言った。

「あら、やぶ蛇になっちゃったみたい」

恵子が気まずそうに言った。

「そういえば、町村さんはお茶を教えておられるんですよね」

「今はホントに細々とお稽古しているだけなんですよ。恵子さんは、たまくにしか顔出さないからね」

「すみません。ねえ、先生、話題変えましょ」

三人の会話を聞きながら、『信仰叢話』に目をやっていた大地が言葉を挟んだ。

「前のページにこんな文章がありますよ」

と言いなながら、大地はまた『信仰叢話』を読み始めた。

『いつも申しますように、天地自然が絶大なる芸術品であり、毎日が芸術の展覧会である。すなわち、神さまご自身が最大の芸術家であらせられるのであります。金がなければできぬとか、暇がなければできぬというようなものでない。多忙の中に芸術が織りこまれ、またそれ相応な余裕において芸術が解し得られる。

何もむずかしい道理や余計な金のいるような芸術に凝らなくても、そのへんの調度品、あり合わせのものを如何いかにうまく活いかして使うか、美しく調和させるか、いかに自然、人事の風雅、景致を感受し観賞、享樂するかというところに芸術はあります。

芸術的な人は、必ずものの調和ということに敏感である。話が宙に飛びますが、天国の美うつくわしいのは調和があるからでして、みながチャンとおくところに置かれている、使うところに使われている。不自然がない。美というものは一つ一つの美よりは、いろいろなものがたくさん集まって、それが調和しているときの総和の美の方が、より価値が多いのであります』

「…なんだって、恵子おばさん」

大地は、視線を『信仰叢話』から恵子の方に移しながら言った。

「もう大地君、どっちの味方？」

「大地君、一本！ だね」

高村が言った。四人とも笑顔になっていた。

清らかな遊び

「今、大地君が読んだところにあつた芸術的な『総和の美』というのは大切なことなんだと思うねえ」

音江が言った。

「そうですね、全体的な調和の美しさということでしょうが、何事においても、調和や和合というのは大切なことだと思えますね」

高村が相づちを打った。

「お茶の稽古でも調和が大切。お茶のお道具もそうね。私の家にはあまり高価なお道具はないので、ちよつとした物をお道具に代用してお稽古することもあるんですよ。そんな時は、ほかのお道具と違和感がなく調和できるように注意しているんです。でもね先生、この取り合わせを考えるのが、結構楽しいんですよ」

「たとえば、どんなものを使われているんですか？」

「海外旅行のお土産でいただいたしゃれたエッグスタンドを蓋置ふたおきにしたり、銀の口ウソク立てを一輪挿いちりんざしの花入れにしたりするんですよ」

「そういえば、いただいたおしゃれな大理石のピルケースを、おばあちゃん『こりゃ

「あいいね」って、香合こうじょうにしていたことありましたね」

恵子が思い出したように言った。

「そうだったね。意外といろんなものが、お道具として使えるものでね、それを工夫するのが楽しいことなんですよ」

「なるほどね」

高村が納得したような表情で言った。

「あの、僕はあまりお茶のことは知らないのですが、茶道ではいろんなものを応用してもいいということなんですか？」

大地が、首をひねりながら言った。

「あ、ごめんね大地君。もちろんお茶会などでは、ちゃんとしたお道具を使うことは必要なんだけど、そのことにあまり過敏になりすぎて、道具を競うようなことになつては、本末転倒してしまうということなんだよ。だから、町村さんのように、お土産でいただいた気の利いた一品を、香合や蓋置に應用して、お稽古で使ったりされるといふのは、とても良いことだと思うんだ。お土産をくださった人が、その席にいれば感激されるだろうし、こういう使い方もあるんだ」って、皆さんの関心も高くなるん

じゃないかな。そうしたことは、三代教主さまも望んでおられたことだどご著書のお示しから拝察できるし、その「ごころ」が、大本の中では茶道の普及や稽古を通して広がっていったんだと思うなあ」

高村の話を聞く大地の様子を見ていた音江は、大地が茶道具の名前も理解していないだろうと察し、話題を変えて大地に質問した。

「大地君、茶道って何をするもの？」

「えっ、茶道ですか？ お茶の稽古ですよね」

「そう、そのお茶って？」

「抹茶ですよね」

「そうね、お抹茶をいただくのよね。茶道は突き詰めると、一服のお茶をお客さんにかにおいしく差し上げ、お客さんはそれをいかにおいしくいただくか、ということなのね。茶の湯とはただ湯をわかして茶を点^たてて 飲むばかりなる事と知るべし」という利休百首の歌があるんだけど、核^た心的な歌だよね」

「なるほど、わかりやすい歌ですよね」

大地が笑顔で言った。

「でも、その『飲むばかりなり』がなかなかむずかしいのよね」

恵子が言葉をはさんだ。

「僕もお抹茶はいただいたことがあります、作法はちよつと面倒くさいですよね」

「そうね。最初はそう感じて当然よね」

恵子が相づちを打ち、高村が説明を続けた。

「若い人はそう感じるだろうね。でも、一服のお茶を差し上げ、それをおいしくいただくためには、そこに作法があつた方が、お互いより良い関係を作ることができるんだよ。決まつた作法やルールをお互いが知っていて、亭主はその作法の上で心を込めてお茶を出し、お客はその気遣いに感謝しながら、作法通りにお茶をいただく。それによつてはじめておもてなしの『ごころのやりとり』ができるんだよ。おもてなしというのは、接客する方の気持ちが大切なのは当然だけど、受ける方も、心得がないといけないんだね。双方の心得、気持ちが大切なんだ。道具の調和もそうだけど、人と人とのこころの調和がいちばん大切だと思うよ。そのためには最低限の作法を学ぶとは必要なんだね」

「そうなんですな」

「ぶしつけとか、礼儀にはずれたことを『無作法』というけど、作法が無いなという言

葉だよ。それから、茶が無いで、「無茶」って言うしね」

「なるほど」

高村の説明に、大地が頷いた。

「ということ、やっぱり作法を勉強しないといけないんですね」

「そうよ大地君、作法を勉強していたら、心が豊ゆたかになり、ゆとりも生まれるのよ」

音江が身を乗り出して大地に語りかけた。

「これは聞いた話だけどね、昔、ある年のお正月の夜、三代さまがイギリスから来苑されていた二人の女性をお茶席にお招きされたことがあったの。三代さまは、『ハッピーニューイヤー』とおっしゃりながらお席に入られて、二人がキチンと膝をそろえているのを目にされて、『お楽にしてくださいよ。ドッコイショ、私もあぐらをかきましよう』と、顔をしかめながら、あぐらをおかきになったの。二人は、すっかり安心されてあぐらをかき、とてもなごやかな席になったそうよ」

「へえ、すごいですね」

「三代さまにとつて、あぐらはちつとも楽ではないのよ。ご退席の時も、立ち上がるうとなさって思わず『アイタタタ』と声を立てられたので、席はまた笑いに包まれ、

しばらくは楽しさの余韻が残っていたそうよ」

「私もそのお話は先輩からうかがったことがありますが、相手の立場に立った三代さまの、深い思いやりのお心が伝わってくるすばらしいエピソードですね」

高村が言った。

「なるほど、そういう思いやりの形もあるんですね」

「お客さまをおもてなしするときは、相手の立場に立った思いやりと、それを形にあらわす工夫が必要なのね。そうしたことを学ぶのに、茶道の稽古はとてもよい実践だと思わね。だからこそ、三代さまは信徒に茶道の稽古を勧められたのよ。立ち居ふるまいやあいさつ、お辞儀の仕方も教えてもらえるしね。大地君もそろそろお稽古してみたら」

「そ、そうですね…。いずれまた」

「できるだけ若いときから始める方がいいのよ」

「はい、そうですね…」

音江の誘いに、大地は尻込みしながら答えた。

「三代さまは、世間のお茶は世間のお茶で、大本は、神さまがおつくりになったお道

の団体だから、清らかな楽しいお茶を行ってほしいと願っておられ、自らご精進なさり、広く信徒に推奨されたんだ。最初は、教団の中でも、三代さんは、お茶や舞をして遊んでいる。なんて非難する人たちもあつたようだけど、三代さまは貫き通された。そのご努力によって、開祖さまから受け継がれた「大本の教風」が今に継承されてきたんですね」

高村の言葉に音江が頷いた。音江は目を閉じながらかみしめるように言った。

「その三代さまのみ心に応えるためにも精進しないとね。茶道も自分の生活の所作に稽古したことが生かされてはじめて、お茶が身についたということになるのよね。私も、いつまでたつても修行だねえ」

「いえいえ、町村さんはご立派ですよ」

「いやだよ先生、からかわないでくださいよ」

「あらあ、おばあちゃん、照れてるんですか？」

恵子の言葉に座が和んだ。

少し間を置いて高村が口を切った。

「大地君、遊びは好きかい？」

「えっ、遊びですか、そりゃあ、好きですけど…」

「じゃあ、人生に、遊びは必要だと思う？」

「はい、絶対に必要ですね。遊んで息抜きすることは大切なことだと思います」

大地は胸を張って答えた。

「大地君が今思っている遊びって、どんなもの？」

大地は少し考えて答えた。

「自分の好きなことですね。たとえばスキーやカラオケ、友達とワイワイ楽しむことなんかでしょうか」

「実は、私が言っている遊びというのは、茶道のようなものをいうんだよ」

「えっ、茶道って稽古事じゃないんですか？」

「いや、これこそが立派な遊びなんだよ」

「でも、どちらかというと難しい習い事って感じですけど…」

大地は不思議そうに言った。

「尊師さまはお若い頃、『自分はこの世に遊ぶために生まれてきた』とおっしゃっていらした、と三代さまが紹介なさっているんだけど、尊師さまのおっしゃる遊びというのは、娯楽的なものではないんだね。三代さまは、『遊びというものは、遊びを楽しみながら、

道をおそわるものであると思っています』とおっしゃっているんだよ。そして、『清く遊ぶことによつて、神さまにお仕えさしていただいていることもあります』ともお示しになっているんだ。尊師さまのおっしゃる“遊び”もそうした道を学ぶ“清らかな遊び”のことなんだろうね。大地君もそんな遊びを見つけ、身につけられたらいいね」

「なるほど、ほんとうの遊びというのは、奥深いものなんですね」

音江も恵子も、大地といっしょに頷いていた。

信仰即生活即芸術

「遊びを楽しみながら、道をおそわるもの……かあ。そんな遊びとは、今のところご縁がないですね」

「大地君はまだ若いからね」

恵子が大地に向かって言った。

「そうだね。なかなかチャンスも少ないだろうからね。でも、大地君には、これからは意識して、清らかな遊びと思える芸術や、日本の伝統文化に接する機会を多く持つてほしいと思うなあ。そして、まずはチャレンジ！ 何かやってみるといいよ。その中で、自分にあつたものを見つけ、できるだけ若いうちから取り組むといいね。できれば複数。無理なら“これっ！”と思うものを一つでもいいので、とにかく、続けることが大切だよ」

高村が諭すように言った。大地はちよつと自信なさげに小さく頷いた。

「そうね、昔から“継続は力なり”という言葉があるけど、続けていると見えてくるものがあるのよねえ」

齢を重ねている音江が、しみじみと言った。

「その通りですね。お茶でも能楽でも続けていればこそ、体験的にわかってくること
つてありますね」

高村も頷きながら言った。

「高村先生も何か稽古けいこされているんですか？」

恵子が質問した。

「特派に出ているとなかなかできないんですが、一応、お茶と能楽はできるときにお稽古している程度なんです」

「そうですか」

恵子が感心するように言った。続けて大地が高村に質問した。

「あの、大本って宗教団体なのに、どうしてそこまでいろんな日本の伝統文化を奨励しているんですか？」

「そうよね、大地君。私もそのへんのことを一度訊きいてみたいと思っていたのよ」

恵子が大地の質問に口をはさむように言って、高村の方を見た。

「さっき、大本の教えの中に、芸術は宗教の母」というみ教えがあるということは言
いましたよね」

高村が恵子に向かって言葉が続けた。

「この大本のみ教えを理解し、実践するために、その一つの方法として、日本の伝統文化を学ぶことが必要なんですよ。それともう一つ、大本の教風を守り継承していくためでもあるんです」

「教風ってなんですか？」

大地が訊き返した。

「学校の校風とか、会社の社風とかいう言葉は聞いたことない？」

「あつ、あります」

「校風とか社風というのは、その学校や会社が特色とする気質のこと。同じように大本という教団の教風というのは、大本が特色とする気質のことなんだよ」

「大本という団体の持つ気質、気風ということですね」

「そう、まさに“芸術は宗教の母”というみ教えを特色、気質としたものが、大本の教風の一つだと、私は思っているんだ」

「一つということは、いくつもあるんですか？」

「そうだね。大本は宗教団体として、ほかの教団にないいくつかの特質を持っている

から、教風が複数あると言っていると思うね」

「その一つが日本の伝統文化を大切にすることですね。だからおばあちゃんも、熱心にお茶の稽古をしているんですね」

恵子が、目線を高村から音江に向けながら言った。

「そうねえ、芸術に親しむ教風は、開祖さま時代からずっと続いているものですねえ、先生」

音江が高村の方を見ながら言った。

「そうですね。開祖さま、聖師さま、二代さまとそれぞれに大芸術家であったと思います。そして、三代教主さまは、その教風を引き継がれ、自ら実践されて信徒に範を示されながら、広く信徒に奨励されました。しかも茶道、能楽、書道、短歌、陶芸など、とても常人ではできないくらい広く深く、精進なさったんです」

「どれも玄人が一目置くという高いレベルだったそうよ」

「へえ、すごいですね」

音江の言葉に、大地が感心して言った。

「三代教主さまは、人間生活の中で時処位に応じた『行儀』や『順序』が大切で、そ

れを正していくためにも、お茶などの稽古事への精進が大きく役に立つことを示されていたんだよ」

そう話した後、高村が「あつ、そうだ。ちよつと待つてね」と言つて、横に置いた鞆かまぼの中をさぐりだした。

松代荘のロビーから見ると、中庭の木に、ノビタキだろうか、野鳥が数羽とまっている。夕方になり、日帰り入浴で玄関から奥の浴場に向かう人の数も増えてきて、ロビー周辺も少しにぎやかになってきた。

「あつた、あつた」

そう言うと、高村は資料を取り出し、大地の前に置いた。

「これは、以前の講座の時に作った資料なんだけど、ここに三代さまの芸術活動に関するお示しがあるんだよ」

高村が指で示した。大地は、音江と恵子にも見えるように少しずらして、資料に目を落として、小声で読んだ。

『信者の一人一人の方が、ほんとうに仕合わせになつていただくことにより、世界の

平和につながって行くことを、わたくしは信ずることができます。

神さまを拝み、み教えによつて智性と愛情に、神さまの光と熱をいただき、健康にとつとめ、心の持ち方を和やかにし、勇気をふるいおこして日々の業に励みつつ、仕合わせをきずいていただきたく念じてやみません。

それにつきましても、わたくしが、信者の皆さまに、こいねがいます一つのことは、お互いの信仰に順序と時処位による礼儀を尊重して、一大和合による神光輝く大本にさしていただきたいことであります』
(昭和四十年一月一日)

『おたがいが信仰によつてつちかわれた誠をあらわすには時、処、位をわきまえ、礼儀になつたものでなければなりません。きよらかな心、誠実な精神を形にあらわしたものが礼儀でございます。』

信仰におきましても、精神的なことへのみ心を集中して、外にあらわれる姿をおろそかにしては、礼を失する結果をまねくおそれがございます。皆さまがこれまで信仰によつて、つちかつてこられました美しい心、まことの心のあらわれにふさわしい礼儀が磨かれていくことによりまして、み教えに示されております「霊体一致、言心行一致」の信仰が深められてまいることと存する次第でございます』

(昭和四十年二月三日)

『日本の女の人が、お茶をならって、おうす、おこい茶、おすみ、たなもの、それからお茶事と、これだけおぼえれば、すばらしい国になります。お茶事をやらしてもらいますと、教養というものが身について、その人の生活になってきます。なにかに応用できますし、自然にものを活かして使うようになれます。それには、茶の湯の点前を教えてもらうだけでなく、お茶のこころを習う気持ちが大切です』

(『寸葉集』一)

大地が読み終えて、頷いている。間を置いて高村が説明を続けた。

「このお示しにあるように、お茶の心を形にあらわして実践することが、生活の改革と信仰の向上につながっていくと教えていただいているんです。でも、お茶や能楽などの日本伝統芸術を稽古するというのは、ともすると、生活とはかけ離れた外にあり、別の世界のように思われるかもしれません。でも、尊師さまは『宗教は芸術となって体現す』とお示しになっていて、芸術はけっして生活の外にあるのではないんです。つまり信仰も芸術も生活とともにあるのが、本来の姿だと教えていただいているので

すよ」

「私も本当にそう思います。自分自身ができていくかどうかは別として、その通りです
すね」

音江が頷きながら高村に向かって言った。

「大地君、こうしたことを一言でいうと、『信仰即生活即芸術』という言葉になるんだよ」
「信仰即生活即芸術…、ですか」

大地が確かめるように、高村の言葉をゆっくりとくり返した。

「芸術というのは、日本人としての人間らしい生き方を確立するためには欠くことのできない道の一つなんです。そして、それを、信仰を礎いしずえとして実践するとき、その人の姿や形が改められ、その結果心が浄化されて、おのずから人としての道が確立されていくのだと思うんですよ」

高村は自分の言葉を確かめるように話した。

「なるほど、信仰が生活の中に清らかな遊びとなって現れ、三つがいつしよになることが理想ということですね」

大地が頷きながら言った。

「この教風は、四代教主さま、現教主さまと、今に受け継がれてきているわけだねえ。ありがたいねえ」

音江が笑顔で言い、恵子と大地が頷いた。

温泉から上がってきた日帰り入浴の家族らが、楽しそうに笑いながら、大地たちの横を通っていった。

(続く)

「暁の大地」第2巻
おわり